

新國文讀本

卷五

375.9

Y019

資料室

41422

教科書文庫

4

810

41-1933

200030

1714

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



資料室

375.9
Y019

文部省檢定濟

中學國語教科用科 日三十月一年八和昭
實業學校國語教科用科 日三十月七年八和昭

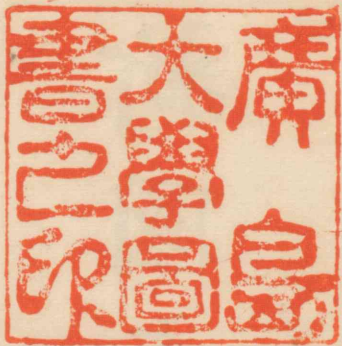
吉田彌平編

新國文讀本

東京 光風館藏版

卷五





新國文讀本卷五

目次

一	明治天皇の御製	北原白秋	一頁
二	花の吉野	田山花袋	九
三	園の春	三木露風	一六
四	初蛙	薄田泣菫	一九
五	長谷部信連	〔平家物語〕	二四
六	日蓮上人	高山樗牛	三三
七	富士の靈	野口米次郎	三六

目次

一

八	父君よ	松岡讓	四
九	影	八波則吉	五
一〇	文の背景	小笠原長生	六
一一	葉書文學	室鳩巢	七
一二	源平の三烈士	〔義經記〕	九
一三	浮島が原	荻原井泉水	全
一四	山の池	横有恆	全
一五	アルプスの夏	矢野龍溪	一〇三
一六	ハンニバル	永井潜	二二
一七	競技の精神	〔狂言記〕	二五
一八	どぶかつちり		

一九	「大倉鶴彦翁」序	徳富蘇峯	一三
二〇	雑草	阿部次郎	一三〇
二一	郷土の魅力	相馬御風	一三四
二二	戦國時代の三傑	三上參次	一四七

現在おはしま
す神のまにま
天皇のこころ

天田王が神様
の地位 倭國を
ささぐること

神代が三神
さまのまにま
なつた道

北原白秋

詩人で歌人

名は隆吉

明治十八年福岡縣柳

河生

後りあつた

うやまへ
あひま

まうす

あまのこころ

あまのこころ

新國文讀本 卷五

一 明治天皇の御製

北原白秋

明治天皇は現神まげつかみとしての大自覺に立たせられた。此の神な
らの道に立ちまことに聖帝として萬民の景仰を受けさせられ
た。その御製を拜すれば、王者の御風格が大御心を通して、蒼穹
のごとく、日輪のごとく、一天四海に輝きわたらせられる。歌柄
といふ點から見れば、あらゆる古今の名歌人も、大帝の御前には
鞠躬如たらねばならぬ。帝王と凡下とはおのづからにして違
ふ。これは天意であつて、如何ともいたしやうがない。

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心とも
がな

御製はおのづからなる歌調で、御歌所の歌調を遙かに超越して
おはせられる。ある歌人が萬葉調でおはせられぬといふ點に
ついて遺憾の意を表してゐたが、萬葉調ならぬ點こそ御製の御
製たるところではないか。要するに大帝の御製は實に大帝の
御風格そのものであつて、桂園調とか萬葉調とかを以て評し奉
るべきで無い。形式以上の大御稜威がそのまゝの帝王調とし
て流露し光被してゐる。私どものひたすらに欽仰し奉る所以
は實に茲に存するのである。
眞の王道こそは大帝の踐ませたまふ絶対無二の天の道であつ
た。現神としての御自覺そのものが既に一の宗教でおはせら

御歌所の歌調
宮内省御歌所長高崎
正風などを主とする
桂園派の歌人の歌調
萬葉集の歌調
萬葉調
御歌所
桂園調
桂園香川景樹を祖と
する和歌の調
ハインヤハ
マカメ
カンハイ
ウマ
ツシキ
アヒ
イカン
イカン
イカン

花ぐはし櫻もあれど
このやどの世々のこ
ころを我はとひけり
明治八年四月四日
明治天皇小梅の水
戸徳川邸行幸の折
の御製を五月五日
に當主徳川昭武に
下し賜うたもの

れた。御製を一々拜誦するに、その殆ど總べてが、皇祖皇宗を崇
め、國を思ひ、民を恵み、四海の和平を求め給ふ御聲ならぬはない。
これ我が國民の深く感佩し奉るべきところである。大帝は、人
たるの道、子たるの道、言の葉の道、をあくまでも實に即いて御詠
み遊ばされた。その中には教訓中の教訓、道歌中の道歌として、

明治天皇宸筆

公爵 徳川 圀 順 藏

花ぐはし櫻もあれど
世々のこころを我はとひけり

純藝術以外の見地から拜せられる御製も少くないが、純藝術と
拜し奉るべき御作品も亦頗る多い。世の教育家、宗教家、道學家
たちは、御製の純眞なる御風格を冒瀆し奉つて、その各自の道の

① ちしきやうたう (ちしきやうたう) (ちしきやうたう)
 ② リンゴ (リンゴ) (リンゴ)
 ③ ー (ー) (ー)
 ④ ー (ー) (ー)
 ⑤ ー (ー) (ー)
 ⑥ ー (ー) (ー)
 ⑦ ー (ー) (ー)
 ⑧ ー (ー) (ー)

爲に牽強附會してはならぬ。何となれば、大帝の御製は理趣のための理趣でなく、一に王者としてのさながらの御詠歎であらせられるからである。

人口に膾炙してゐる御製以外の御製によつて、大帝の御一面をうかゞひ奉つても、私はほとゞ歌人としての大帝を思慕し奉るの情に堪へない。

誰人もまだそこに言及したものが無ささうに思はれる。よつて余は敢へて茲に其の種の御製を謹鈔して、歌壇の人々の拜誦を希はうと思ふのである。

庭菊

この秋もところどころにきくの花うゑてたのしむ九重のには

をりにふれて

庭のおもは若葉しげりてすゞかけの花さく頃となりけるかな

朝顔

しばがきにまとひあまりて萩の葉の末にもさけり朝顔の花

秋風寒

宮のうちもふく風さむくなりけり山べはいまや時雨ふるらむ

をりにふれて

小山田のをしねかるべくなりぬらむ庭の薄もほにいでにけり

をりにふれて

冬がれの芝生の堇さきにけり小春の日影さしわたりつ
つ

雨中萩

すゑまではまだ咲きみたぬ秋はぎの花うちみだり村雨
ぞふる

禁庭萩

昔わが折りてあそびし萩の戸の花もこのごろさかりな
るらむ

秋月明

ともしびをかゝげぬ方に來てみればいよくあかし秋
の夜の月

里

うつせみの代々木の里はしづかにて都のほかのこゝち
こそすれ

堇

をさなごにつませまほしと思ふかなすみれ花さく庭を
めぐりて

峯雪

こがらしのふきはらしたる空遠く甲斐のたかねの雪ぞ
見えける

子

思ふことおもふがまゝに言ひいづるをさな心やまこと
なるらむ

代々木の里
東京市澁谷區代々木
もと御料地
今明治神宮内苑

(1) 思無し
せふとまらる
こと

(2) 思はる
思はる

(3) 自然に
自然に

(4) 思無し
思無し

(5) 思無し
思無し

思邪無し
詩三百、一言以テ之
ヲ蔽フ。曰ク、思邪
無し。(論語)

良寛
歌僧
越後出雲崎の人
天保二年(二四九)寂
年七十四

(7) 思無し
思無し

世のさまはいかゞあらむとかたつぶりをりく家をい
てて見るらむ
見花
高殿の窓てふまどをあけさせてよもの櫻のさかりをぞ
みる
何等の滞りもあらせられぬ。その「思邪無し」は天の「思邪無し」で
ある。良寛の歌はよいといふ。しかし良寛以上に大帝の御製
は眞率で無心であらせられる。良寛は天成の童心者であつた
であらう。しかし、かの「思邪無し」の境涯は禪家としての修道と
忍苦とから更に深められて、始めて幼子の心に還つたものにち
がひない。大帝は抑、からそのまゝであらせられる。禪家の悟

蝸牛

世の牛の糞はどろどろかど
考へて蝸牛がせりせり思ふ
あま出して思ふはあまう

高殿の窓とつら窓をばすつかりす
させてのうらう櫻のさかりを見よ
あるよ

蕩々乎として天の
如し
子曰ク、大ナルカナ、
堯ノ君タル。巍巍乎
トシテ唯天ヲ大ト爲
ス。唯堯之ニ則ル。蕩
蕩乎トシテ能ク名ヅ
クル無シ。(論語)

田山花袋
文學者
名は録彌
群馬縣館林生
昭和五年歿
年六十

金剛山
葛城山の一峯
奈良縣大和國南葛城
郡葛城村に峙つてゐ
る

六田
奈良縣大和國吉野郡
六田
上市町の南四軒
吉野川の右岸

入やそれに附纏ふいやみが些かもあらせられぬ。この純眞無
垢こそは天意である。良寛の歌を渴仰する歌壇は良寛以上の
大帝の御製のある事に心を留めねばならぬ。
太古にして太新、蕩々乎として天の如しとは、まことに聖帝明治
天皇の大御心であらせられる。(季節の窓)

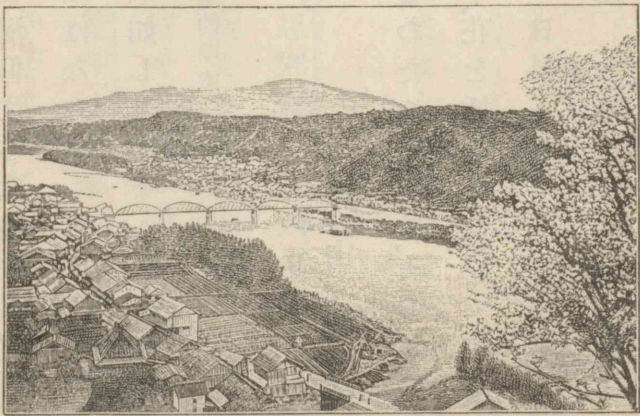
二花の吉野

田山花袋

金剛山を越えて吉野の六田の渡をわたつたのは、その日の午後
四時少し過ぎた頃であつたが、途中、花を挿して歸つて來る人に
聞いて見ると、花は今が眞盛で、今一日早くても、遅くても、満開を
見る事は出來ない。との事であつた。夕日はもう彼方の山の凹
處に沈まうとして、清い速い吉野川の流は閃々と美しい紋を川

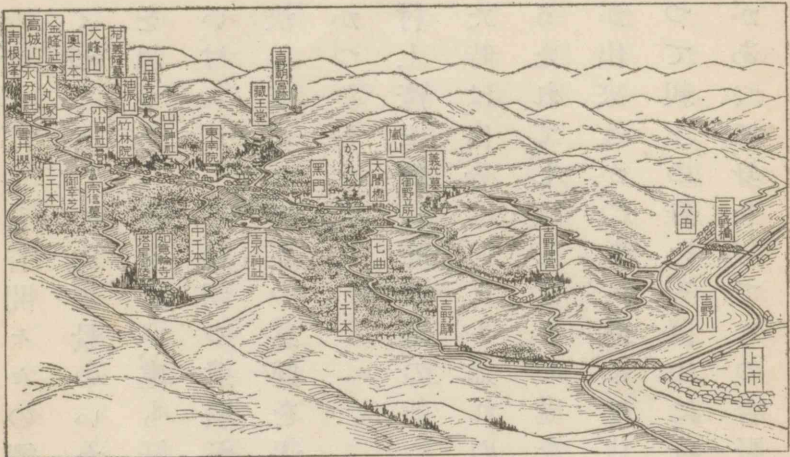
奥の院
奈良縣大和國吉野郡
十津川郷の東に横た
はる大峯
吉野を本院といふに
對する語

の面に描いてゐた。自分は船が前岸に着くと、そのまゝ急いで
飛びおりて、一直線にその懐かし
い吉野山へと志した。
街のはづれに一つの黒い門があ
つて、此處から奥の院まで六十町
餘と書いた札などが立つてゐる
が、それを潜ると、もう山で、櫻の花
が段々路の兩側に見えだしてく
る。入口は盛が過ぎて、花びらの
枝に残つてゐるのも極めて少い
が、次第に登れば登るほど、花は多
く、盛になつて、四邊の眺の美しさは殆ど言葉にも筆にも盡くす



六 田 渡

十津川
奈良縣大和國吉野郡
十津川流域の郷
千早
金剛山の西の麓
大阪府河内國南河内
郡千早村
赤坂
同郡赤坂村
千早の北

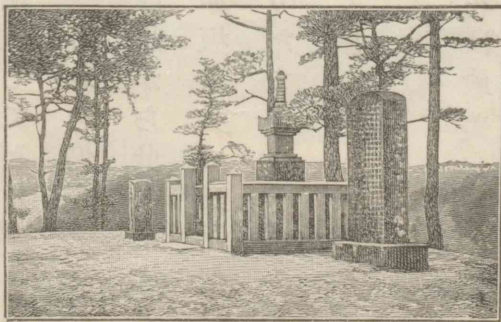


吉 野 山 附 近

ことが出来ない程である。右
手には越えて來た金剛山が偉
丈夫の端坐してゐるやうに聳
えてゐて、それを仰ぐと、護良親
王が十津川から此の地に入つ
て、千早赤坂と共に三足鼎立の
勢を作りたまうた時のことな
どがすぐ胸をついて浮んでく
る。
兩側の花は愈々美しい。
自分は行く／＼右と左の大澤
を見下しながら、夕日の花やか

な光がばつと谷間々々の櫻花の上に匂ひ渡るのを見て、獨りつくづくこの山の景のいかに懐古の情を起すに適してゐるか
を思つた。花も好い、處も好い、山も面白
い、けれども吉野朝の遺蹟が無かつたら、
決してこれほどの感興を起すことは無
かつたらうに。

村上彦四郎義光の墓の前にひざまづいた時は、自分は何とも知れぬ悠久の感に
うたれて、しばしはその處を立去ること
が出来なかつた。前には片岡八郎があ
つて親王の難を玉置山に救ひまゐらせ、後には此の彦四郎義光
があつて、身を以てこの吉野の退口のきぐちを安全に守りまゐらせたの



村 上 義 光 の 墓

村上彦四郎義光

吉野朝の忠臣

信濃の人

元弘三年(一九〇)護良

親王に代つて吉野に

戦死した

片岡八郎

吉野朝の忠臣

玉置山

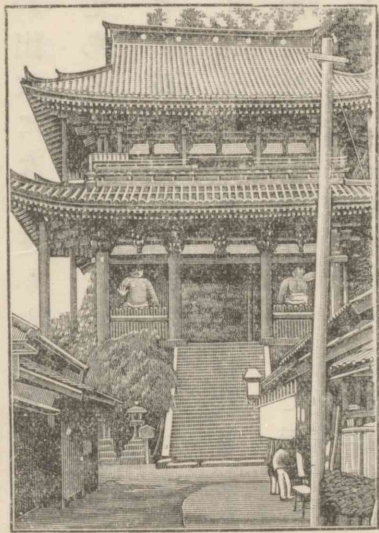
十津川郷の中央部に

ある山

であるが、もし後年に至るまでこの忠勇無二の義光が生きてゐ
たならば、親王は決して鎌倉の土牢にはかない最期を遂げさせ
たまふやうな事はなく、或は吉野朝の衰へたのを恢復する事が
お出来になつたかも知れない。つたないのは吉野朝の御運命
である。

この時である、自分の立つてゐる傍に一群の酔客が跣々跟々と
して歩いて来て、卑しい歌をうたひながら、遠慮もなしに自分の
肩を掠めるやうに過ぎて行つたのは、自分は既に此の山に登
つた時から、心もない花見客の、わい／＼と酒に酔つたり人と戯
れたりして歩く傍若無人のさまを心よからず思つてゐたが、今
は丁度自分の心が無限の感慨に打たれてゐる事として、癪にさは
つて、いつそ罵倒してやらうかと思つた。

けれど、花の穩かに咲匂つてゐる間を一步二歩とたどつて行く
と、その癪にさはつた念は、一種の深い、悲哀の情にかはつて、
どうにもかうにもたまらないやうな心地になつた。と思ふと、



藏王權現堂

涙がはらくとやつれは
てた自分の旅の衣の袖を
傳つて落ちた。そして草
莽の孤臣といふ感が胸も
狭しと溢れて来て、自分も
若し其の時代に生れあは
したならば、たとひ雑兵となつても、この勤王の志を致したであ
らうにと思つた。

其處から吉野の山奥までは五十町、自分はこの間をどんな感慨

とどんな涙とを以て行過ぎたであらうか。護良親王の奮戦し

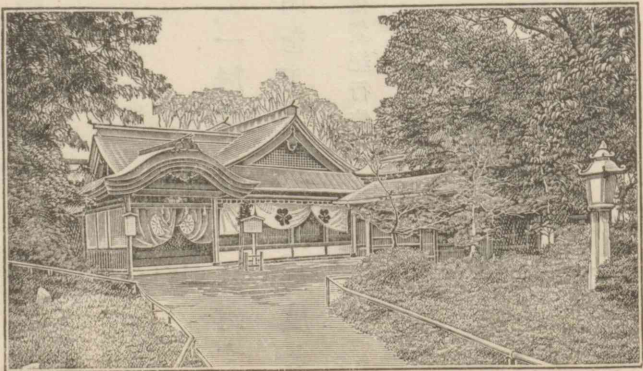
藏王權現堂
吉野山中にある金峰
山寺の本堂
藏王權現を祀つてあ
る

吉水神社
後醍醐天皇を祀る
もと吉水院といつた
藏王堂の供僧坊
行在所
後醍醐天皇の

らせては、どんなに深い暗涙に咽んだ
であらうか。

此處で、後醍醐天皇は劔を按じておか
くれなされたのである。此處で、楠木
正行は辭世の和歌を如意輪堂に遺し、
死を決して敵軍に向つたのである。

此處で、吉野朝五十年の帝業は建てられて、正義といふ精神は赫



吉水神社

赫として光を日月と争つたのである。そしてその六百年前の夢のあとは、今もなほ美しい満山の花影の中に、微かに匂ふばかりに残つてゐるのである。

これほど美しい詩がまたとあらうか。

自分はこの吉野朝の遺跡を處々に見て、一層深くこれに對する同情の念を増した。そして、翌日吉野山を下る時には、幾度となく振返つて、殆ど別れ難い思がした。(花袋紀行集)

三 園の春

三木露風

日の色白くなりて、
春は闌けゆく。
水ぬるみて、

三木露風
詩人
名は操
明治二十二年兵庫縣
龍野町生

緑の樹の影を映す。

花散り、

若葉の色鮮かに、

小徑靜かなる、

あゝ園の春よ。

こゝは人の來ること稀に、

林茂りたれば、

靜寂を愛する吾によし、

獨り逍遙ふ。

吾、青春にして猶

静寂を好み、

人げなき處を歩めり、

樹は吾を覆ひたりき。

木の間を透きて洩れくる陽よ、

地に印す、あまたの濃き葉の影よ、

丁字の花の咲きて、

緑の樹の中に高き薫を漂はす。

そこなる園の家、

詩に親しむ吾のため、

静寂を愛する吾のため、
園の林と花と小徑とを愛する吾のために佳かりき。

あゝ我が思出よ。

花の香の漂ふ中に園の春は徂かんとし、

緑の色快き初夏は來らんとす、

かくて吾は、徂く春を惜しむ。(昭和詩選)

四 初 蛙

薄 田 泣 堇

古沼の水もぬるみ、蛙もそろ／＼鳴き出す頃となりました。月
が朧に、燻し銀のやうに沈んだ春の眞夜中時、静かなる若葉の樹
陰に立ちながら、あてもなくじつと傾ける耳に傳はる仄かな音

薄田泣堇
詩人
名は淳介
明治十年岡山縣連島
町生

づれ——
 「くる……くる……くる」
 と、古沼の底から生れた水の泡が、圓く沼の面に浮びあがつたかと思ふと、そのまゝはぜられるやうな、それによく似た物の音を聞きますと、

「あゝ、もう初蛙が鳴いてゐる……」
 と誰でもがすぐに氣づかうといふものです。

私はあの初蛙の鳴聲が好きです。寒い冬の間の長い夢から覺めて、これから思ふ存分はしやがうといふその前に、あつちでも、こつちでも、さも四邊の立聞をでも氣遣ふやうに内證で聲だめしをしてゐるあの音を聞きますと、丁度土塊を押分けて、むつくりと頭をもち上げた早蕨か菌かを見るやうな、無邪氣といったづ

イソップ

西洋紀元前六世紀頃の希臘の寓話作家

Aesop

アリストファネス

Aristophanes (前445—前385) 希臘のアテネの喜劇作者

小野道風

平安朝の書家

三蹟の一人

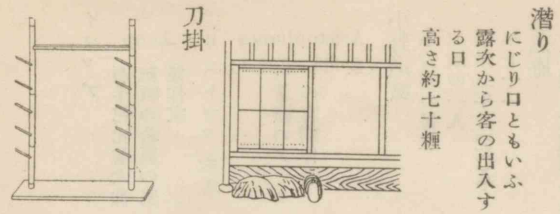
康保三年(二六六)卒

年七十一

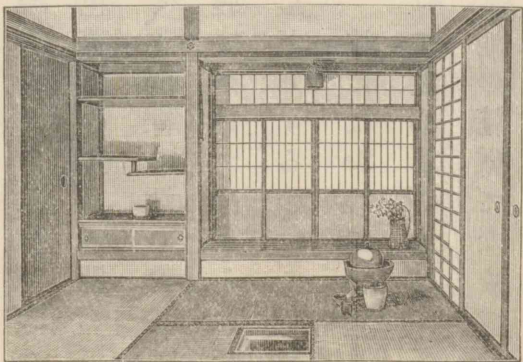
芭蕉庵

江戸深川六間堀にあつた松尾芭蕉の閑居

らつ氣とが味ははれます。それはちつぽけな、智慧と元氣とに充ちた地の精靈の無邪氣といったづらつ氣とです。博識なイソップや、人の悪いアリストファネスが見てゐようと、怠け者の小野道風が立つてゐようと、貧乏詩人の芭蕉庵の主人が聞いてゐようと、そんな事には少しの頓着もなく、すつ裸の濡れ身のまゝ、柳の枝でぶらんこをしたり、背から腹にかけて砂まみれになつたまゝ、もんどりうつて古池に飛込んだりするの、この無邪氣といったづらつ氣とがさせる業です。蛙にはお腹に臍がありません。それなのに、臍ばかりか、おまけに良心までも持つてゐるかのやうに無遠慮に振舞ふのです。地の精靈でなくつてどうしてあんな悪ふざけと無遠慮とが出来るものでせう。大きな口と下つ腹とを御覽なさい。地から生れた、食意地の張つた



大食漢でなくつて、誰があんなものを持つてゐるでせう。實際あの大きな口と、だぶくの下つ腹とは、蛙にとつては掛けがへのない寶なのです、性格なのです、本能なのです、靈魂そのものなのです。蛙はスマイリーが自慢の奴のやうに、丹誠して仕込みさへすればいろんな藝を覺えます。昔笛の名人に柳田將監といふ男がありました。自分の茶室の潜り近くに竹製の刀掛を拵へておきました。或日の事、將監が笛を取上げて、自慢の一曲を吹出すと、側から涼しい聲でそれに音を合はすものがあります。將監は不思議に思つて、聲のするところ



茶室
銀閣寺東求堂

を探しますと、それは刀掛の竹からで、竹の中に雨蛙が一匹棲んでゐました。

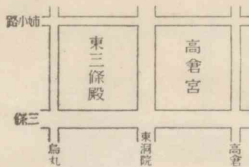
「これは珍しい。餘り騒ぎ立てて、奴さんが逃げださないやうにしなくちや。」

將監は家の者に言付けて、その刀掛のあたりには餘り近寄らないことに決めました。そして時折笛を吹いて聽かせる、その度に刀掛からもいゝ聲が流れ出ました。音合はせの度がだんだん重なつてゆくうちに、雨蛙は節廻しもひどく上手になつて、將監が吹くどんな曲にも鳴きつれることが出来るやうになつたと云ひます。

將監が笛を愛すると同じやうに雨蛙をも愛して、それに音曲を仕込んだ心を、私は懐かしみずにはゐられません。(天地讚頌)

宮

高倉宮以仁王
後白河天皇の第二皇
子
治承四年(八四〇)源賴
政に勸められて平家
を滅さうとされたが
事露れて敗死された
御年三十



五月
治承四年(八四〇)
三位入道
從三位入道源賴政
別當宣
檢非違使別當の宣

五 長谷部信連

さる程に、宮は五月十五夜の雲間の月をながめさせたまひて、何の行方も思召し寄らざりけるに、三位入道の使者とて文持ちて忙しげに出で来る。宮の御乳母子六條佐大夫宗信これを取りて御前に参り、開いて見るに、君の御謀叛既に顯れさせたまひて、土佐の幡多へ移しまるらすべしとて、官人どもが別當宣を承つて、御迎に参り候。急ぎ御所を出でさせたまひて三井寺へ入らせおはしませ。入道もやがて参り候はん。とぞ書かれたる。宮は此の事如何せんと思召し煩はせたまふ處に、宮の侍に長兵衛尉長谷部信連といふものあり、折節御前近う候ひけるが、進み出でて申しけるは、たゞ何のやうも候まじ。女房の装束にいて

廳宣
勅宣に準ずる重いも

幡多

土佐國の西部の地

三井寺

園城寺

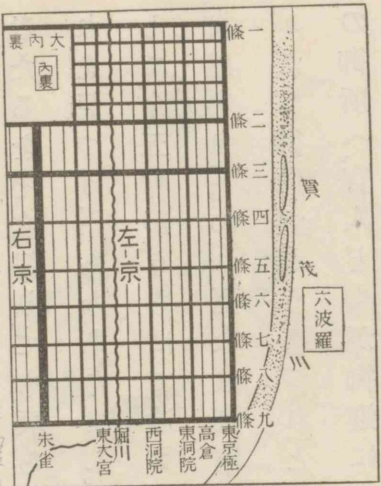
滋賀縣大津市にある

天台宗の名刹

女房の装束



た、せたまひて、落ちさせたまふべうもや候らん。と申しければ、此の儀尤も然るべし。とて、御髪を亂り、重ねたる御衣に市女笠をぞ召されける。六條佐大夫宗信、傘持ちて御供仕る。鶴丸といふ童袋に物入れて戴きたり。たとへば、青侍が女を迎へて行くやうに、いてた、せ給ひて、高倉を北へ落ちさせ給ふに、大きな溝のありけるを、いと物軽く越えさせ給へば、道行く人が

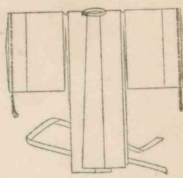


立止つて、はしたなの女房の溝の越えやうや。とて、怪しげに見まゐらせければ、いと足早にぞ過ぎさせおはします。御所の御留守には、長兵衛尉長谷部信連をぞ置かれける。女房

たちの少々おはしけるをば、彼處此處へ立忍ばせて、見苦しきものあらば取りしたゝめんとて見るほどに、さしも宮の御祕藏ありける小枝こえだと聞えし御笛を常の御所の御枕に取忘れさせたまひたるをぞ、立歸りても取らまほしうや思召されけん。信連これを見つけて、あなあさまし。さしも君の御祕藏の御笛を」と申して、今五町がうちにて追つついてまゐらせたり。宮斜ならず御感ありて、われ死なば御棺に入れよ」とぞ仰せける。

「やがて御供つかうまつれ」と仰せければ、信連申しけるは、只今あの御所へ、官人どもが御迎に参り候なるに、人一人も候はざらんは、むげに口惜しく存じ候。其の上あの御所に信連が候と申すことをば上下皆知つたることとこそ候へ。今夜候はざらんは、『それも其の夜は逃げたり』などいはれんこと口惜しう候べし。

狩衣



腹卷



衛府の太刀

六衛府の官人の佩くべき太刀
後には儀仗の太刀になつた



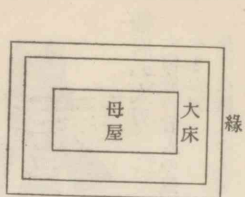
弓矢執る身は、かりにも名こそ惜しう候へ。官人どもに暫くあひしらひ、一方打破つて、やがて参り候はん」とて、只一人取つて返す。



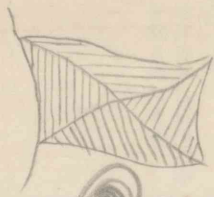
長 薄青の狩衣の下に萌黄もへぎの
谷 池の腹卷を着て、衛府の太刀
部 容をぞ帯おびいたりける。三條
信 齋のぶらの總門をも、高倉表の小
連 筆

門をも共に開いて待ちか

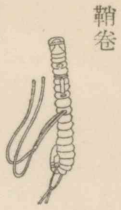
けたり。案の如く源大夫判官兼綱出羽判官光長、都合其の勢三百餘騎、十五日の子の刻に宮の御所へぞ押寄せたる。源大夫判官は存ずる旨ありと覺えて、遙かの門外に控へたり。



出羽判官光長は乗りながら門の内に打入れ、庭に控へ、大音聲を揚げて、宮の御謀叛既に顯れさせ給ひて、土佐の幡多へ遷し參らせんが爲に、官人どもが別當宣を承つて、只今御迎に參つて候。疾うく御出候へ。と申しければ、信連大床に立つて、當時は御所でも候はず、御物詣でて候ぞ。何事ぞ、事の子細を申されよ。といひければ、出羽判官、なんてふ、此の御所ならでは、何處へか渡らせ給ふべかんなるぞ。其の儀ならば、下部ども參つて搜し奉れ。とぞ申しける。信連重ねて、物も覚えぬ官人どもが申しやうかな。馬に乗りながら門の内へ參るだにも奇怪なるに、剩へ下部ども參つて搜し奉れとはいかでか申すぞ。長兵衛尉長谷部信連が候ぞ。近く寄つて過ちすな。とぞいひける。廳の下部のうちにかはたけ金武といふ大力の剛の者、打物の鞘を外し、信連に目を懸けて、大



床の上へ飛登る。これを見て同隸ども十四五人ぞ續いたる。信連これを見て、狩衣の帶紐引切つて捨つるまゝに、衛府の太刀なれども、身をば心得て作らせたるを抜合はせて散々にこそ振舞うたれ。敵は大太刀大長刀で振舞へども、信連が衛府の太刀に斬立てられて、嵐に木の葉の散るやうに、庭へさつとぞ下りたりける。五月十五夜の雲間の月のあらはれ出でて明かりけるに、敵は無案内なり、信連は案内者にてありければ、あそここの面廊に追つかけては、はたと斬り、此處のつまりに追つては、ちようと斬る。如何に宣旨の御使をばかうはするぞ。といひければ、宣旨とは何ぞ。とて、太刀ゆがめば躍りのき、押直し、踏直し、矢庭によき者ども十四五人ぞ斬伏せたる。皇國の興廢社一戦に在り一各員一層奮勵努力せよ。



鞘卷

その後、太刀の鋒三寸ばかり打折つて捨ててけり。腹を切らんと腰を探せども、鞘卷落ちてなかりければ、力及ばず、大手をひろげて高倉表の小門より跳り出でんとする處に、大長刀持ちたる男一人寄合つたり。信連長刀に乘らんと飛んでかゝるが、乘損じて股を縫ひざまに貫かれ、心は猛く思へども、大勢の中に取籠められて、生捕にこそせられけれ。其の後、御所中に亂れ入つて搜せども、宮は渡らせたまはず。信連ばかり搦めて六波羅へ率てまゐる。

前右大將宗盛卿、大床に立つて信連を大庭に引きすゑさせ、誠にならぬ男は、宣旨の御使と名のるを、宣旨とは何ぞ。とて斬つたりけるか。其の上、廳の下部ども多く、刃傷殺害したんなれば、能くく糺問して事の子細を尋ね問ひ、其の後、河原に引出して首を刎ね

廳
檢非違使廳

河原
鴨河の河原

宣旨の御使
檢非違使は宣下の事を掌る職である

よ。とぞのたまひける。信連もとより勝れたる大剛の者なりければ、居直りあざわらつて申しけるは、この程あの御所を夜な夜なもの窺ひ候を、なんぞふ事のあるべきと思ひ侮つて用心も仕らぬ處に、夜半ばかりに鎧うたる者どもが二三百騎打入つて候を、何者ぞ。と尋ねて候へば、宣旨の御使。と申す。當時は諸國の竊盜強盜、山賊海賊など申す奴ばらが、或は公達の入らせ給ひたるぞ。或は宣旨の御使など名のり申すとかね、承つて候ほどに、宣旨とは何ぞ。とて斬つたる候。凡そ信連物の具をも思ふやうに仕り、鐵良き太刀をも持つて候はんには、只今の官人どもをばよも一人も安穩にては還し候はじ。其の上、宮の御在所は何處に渡らせ給ひ候やらん、知り參らせぬ候。假令知り參らせ候とも、侍ほどの者の一度申さじと思ひ切つてんことを、糺問

所

藏人所の略

大番衆

諸國より交番に上京して禁闕を護る武士

日野

伯耆國日野郡日野郷

に及んで申すべき様なし。とて、其の後は物も申さず。幾らも並みあたりける平家の侍ども、あつばれ剛の者や。是等をこそ一人當千の兵ともいふべけれ。と口々に申しければ、その中に或人の申しけるは、あれが高名は今に始めぬことぞかし。先年、所でありし時、大番衆の者どもの止めかねたりし強盜六人に只一人追つかゝり、二條堀川なる處にて四人斬伏せ、二人生捕つて、其の時なされたりし左兵衛尉ぞかし。あつたら男の斬られんずることの無慙さよ。と惜しみあへりければ、入道相國いかが思はれけん、さらば、な斬つそ。とて、伯耆の日野へぞ流されける。平家亡び源氏の世になつて東國へ下り、梶原平三景時について事の根元一々に申したりければ、鎌倉殿神妙なりと感じたまひて、能登の國に御恩蒙りけりとぞ聞えし。(平家物語)

高山樗牛

評論家

名は林次郎

文學博士

羽前國鶴岡生

明治三十五年歿

年三十二

法華經

妙法蓮華經

釋迦が四十餘年の説

法の後に説かれたといふ

佛敎の奥義を記した經

六 日蓮上人

高山樗牛

日蓮上人は獨り鎌倉時代のみならず、日本歴史上各時代を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は宇宙間第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害を被るともびくともせずと覺悟し、法華經のために此の臭き頭を刎ねられんは、沙に黄金を換へ、糞に米を代ふるなり。と喝破し、眼中權勢もなく、威武もなき、眞に高天濶地、獨立獨歩の大豪傑なりき。さりとして、豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。上人が人情に篤く、恩誼に深く、その情時としては禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に咽ば

四條金吾
四條中務三郎左衛門
頼基
建長年中日蓮宗に歸
依した
法名日頼
正安二年(一二九〇)寂
年七十三
江馬遠江守
名は光時

龍口
神奈川縣鎌倉郡川口
村片瀬
鎌倉町の西六軒



しむるものあり。今左に一二の例を擧ぐべし。

上人の信者に四條金吾とて

江馬遠江守の老臣ありき。

東 京 帝 室 博 物 館 藏 本 據 蓮 日

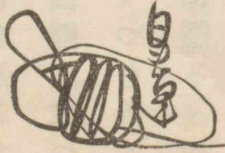
上人は深く此の人の節義に感じ、幾多の消息文を寄せてその至

この人武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列り、不惜生命の覺悟を以て、上人と共に種々の迫害を被れり。上人龍口に斬られんとせし時は、路上に馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。

情を表し給へり。就中、殿にして若し死後、地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。假令釋尊及び十方の諸佛、手を

筆蹟
法華經第七ニ云ク若シ復人アリ七寶ヲ以テ三千大千世界ニ滿タシ佛及ビ大菩薩辟支佛阿羅漢ニ供養スルモ是人ノ功德ヲ得ル所ハ此ノ法華經乃至一四句ノ偈ヲ受持スルノ其ノ福最モ多キニ如カズ
日蓮(花押)

法華經云ク若シ復人アリ七寶ヲ以テ三千大千世界ニ滿タシ佛及ビ大菩薩辟支佛阿羅漢ニ供養スルモ是人ノ功德ヲ得ル所ハ此ノ法華經乃至一四句ノ偈ヲ受持スルノ其ノ福最モ多キニ如カズ

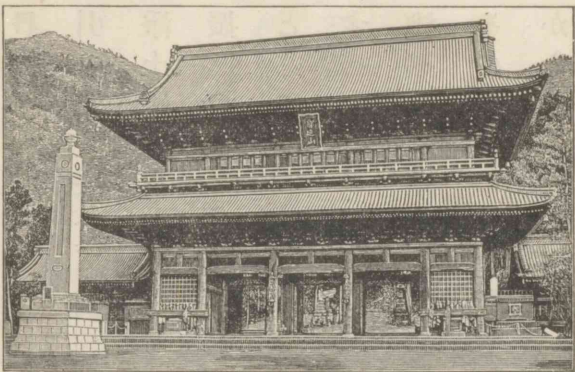


日蓮上人筆

その恩愛の濃やかなること喩ふべきものなし。天下の威武を敵として一步も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕淚ある、殊に貴

ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明らか
に現れ、夙に本化門下の龜鑑となれり。
殊に晩年、日本六十六箇國、島二つの内
に、五尺に足らざる身一つを置く處な
くして身延山の深谷に隠るゝや、九箇
年が間、五十餘町の嶮山を、一日に一度
は必ず攀登りて、遙かに上人の故郷な
る房州を煙波の間に望み、經を捧げて
父母の恩を拜謝せられしが如きは、古
今東西の如何なる孝子傳の中にこれ
と比較し得べき美談あるか。



身延山久遠寺山門

身延山
山梨縣南巨摩郡なる
身延山久遠寺
日蓮宗の總本山

池上
東京市大森區池上町
本門寺のある處
日蓮入寂の地

上人病篤くして、甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領
の檀越波木井氏より、乘馬一匹に舍人一人を添へて遣はされけ
り。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に着きて波木井氏に
贈る書の中にも、馬をいろくいたはしく思ふ旨を書かれ、終り
に、知らぬ舍人を附けて候うては覺束なく覺え候。罷り歸り候
はんまで、この舍人を附けおき候はんと存候。と遊ばされたるな
ど、自身の病苦を厭はず偏に一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく
貴からずや。

眞の豪傑は人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く、恩愛
に濃やかなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の
業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。この情愛なく
ば、かの豪邁もあらじ、かの豪邁あればこそ、この情愛もあるなれ。

二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人格を造るなり。かの美
はしき薔薇の織物を見ずや、表に花と刺と別々に織成さるれど
も、その裏面を見れば、花を織る絲即ち刺を織る絲なるにあらず
や。(釋牛全集)

七 富士の靈

野口米次郎

私は見すばらしい田舎の一少年として、はじめて船で四日市か
ら東上する朝の海上に富士山を眺めた。あゝ、其の時……寒風
肌を劈く二月の朝であつたが、私に對する自然禮讚の幕は切つ
て落された。私はこの莊嚴無比な神の表象を始めて見て、且畏
れ且敬つた。私が若しこの時、富士山から詩の暗示を得なかつ
たならば、詩人としての私の人生は開かれて居らなかつたかも

野口米次郎

詩人

慶應大學教授

歐米に在ること多年

ヨネ、ノグチとして

知られてゐる

明治八年愛知縣津島

町生

四日市

三重縣四日市市

津島から南へ二十八

料

知れない。私の自然禮讚は富士山で始り、富士山で終つてゐる。

實際、詩人の一生は自然禮讚の四文字に盡きてゐる。

詩人として、私はいつも第一印象に支配される。自然の現象が

それ／＼特殊の姿を見せるのは、始めて接する刹那に於てだ。

私は十六歳の時始めて富士山を見てから今日に至るまで、幾度

富士山の姿を近くから、又遠くから眺めたか知れない。四年前

の渡米の際のことだが、船が觀音崎を離れて二三時間もたつと、

薄い灰色の暮色が段々と濃くなつて行つた。甲板に立つて見

捨てた日本の空を遙かに眺めると、しよんぼり私を見送つて居

るものがある……何物か。これこそ、紫色に空をくつきり染抜

いた富士山の圓錐體だ。時も時であるが、私は此の時位、遣瀨な

い、物寂しい、孤獨の感に打たれた事は無かつた。私は聲こそ出

四年前

大正九年

觀音崎

横須賀市の東に突出

てゐる岬

三浦半島の東端で上

總の富津洲と共に東

京灣の咽喉を扼して

ゐる

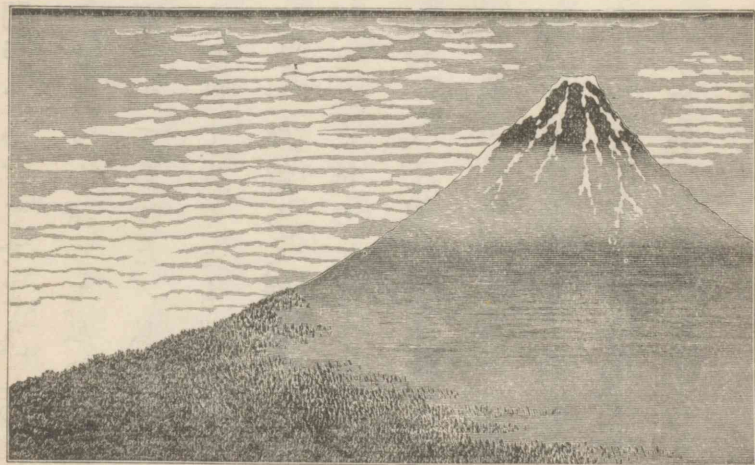
さなかつたが、滂沱たる熱い涙を流した。又この時の富士山位、美の極致を暗示する、世にも尊い姿はなかつた。しかし私が目をつぶつて、心の中に富士山を描く時あらはれて来る姿は、私が十六歳の時に初めて接した富士山である。私は長い年月を外國で費したものだ、私の勇氣が急に挫けた時、われはお前を守護してゐる、恐れずに起て、起つて大空高く上らねばならぬ。と私に勢をつけてくれたものは、その富士山であつた。私が失望の闇の中に落ちて自分の進むべき道を知らなかつた時、われはお前を導いてやる、道は一筋だ……正義の道には努力の花が咲く、そこには神聖な空氣が満ちてゐる、お前は復活せねばならぬ。と私を勵ましてくれたものは、その富士山であつた。「われは階段となつてお前を天に上らせよう。」われはお前に教へて神祕の

門戸をあけさせよう。「われはお前を導いて祈禱の殿堂にはいらせよう。」と語つて、私の守護神となつたのは、私が始めて眺めた富士山であつた。私はその富士山のお蔭で、その富士山の祝福を受けて、少くとも單純な心と高潔な思想とがどんなものであるかを理解して、詩歌の道を歩むことが出来た。私はそれを喜び、それに依つて生きて來てゐる。

私はこゝで私の忘れることが出来ない一挿話を語りた。時は二十一年前の冬で、場所は驚くべき霧が鯨か鮫のやうに跳廻るといふ倫敦だ。私はこの薄氣味悪い、地獄の幾町目かとも思はれる倫敦の市中を、出版者から輕蔑された詩の原稿を後生大事に握りながらうろつき廻つた。或一夜、詩人ビニオンに伴なはれて、詩人でもあり又美術家でもあるムーアの招待會へ出

ビニオン
Laurence Binyon
(1869—)
英國の詩人
美術批評家
特に日本の浮世繪に關する重要な著述がある

ムーア
Moore
(1853—1933)
英國の詩人
批評家
圖案畫家



掛けた。その晩も私の心は暗
 かつた、冷たかつた。ビニヨン
 の言葉で出掛けるには出掛け
 たが、私は談話する勇氣さへ無
 かつた。私は私の詩を認めて
 くれぬ。英國に對して熱烈な
 反感を持つて居つたのである。
 ムーアの宅へ着くと、部屋には
 既に澤山のお客が集つてゐて、
 談話は岸を打つ海の潮の音の
 やうに高まり、部屋の中は倫敦
 の夜のやうに煙で濛々として

凱 風 快 晴
 葛 飾 北 齋 筆

北齋
 葛飾北齋
 徳川末期の浮世畫師
 嘉永二年(二五九)歿
 年九十

居つた。無名の私は宛も鮑か諸子のやうに客と客との間を寂
 しく獨りて泳ぎつゝ、我ながら勇氣が無く、日東男子の沽券に關
 ると思つた時、私はふと部屋の壁の上に懸けてある北齋の富士
 を見た。『凱風快晴』の一枚だ。代赭色の圓錐形を堂々と兀立
 せしめた木版繪だ。私は富士山が語るやうに感じた、我を見て
 起て。西洋人を睥睨して東海詩人の面目を發揮せよ。恐れて
 はならない、慄へてはならない。我はお前に命令する。勇氣を
 出せ。私は直に生氣が五體を震動させるやうに感じた。私は
 直に多辯になつた、私は直に快活になつた。その時から倫敦の
 濫面は笑ひ始めた。私の詩集も世に出ることになつた。私
 は英國文壇に打勝つた。私はどの位、富士山に負ふ所があるか
 知れぬ。實際私は富士山の守護で、少くとも詩人としての人生

東海より
"From
The Eastern Sea"

落合直文

國文學者

歌人

仙臺生

明治三十六年歿
年四十三

筆蹟

門松

ひとつもて君をいは
はむひとつもておや
をいはむふたもと
の松
直文

を開拓して来たといつても過言でない。私が英國での第一詩集「東海より」を富士の靈に捧げたのも、當然私が拂はねばならぬ敬意の一端を表示したものに外ならぬ。(「ヨネノグチ代表詩

八父君よ

落合直文

父君よけふはいかにと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり

川

ひたひたし君をいほひとれを
はむひとつもておやをいはむふたもと

筆文直合落

さわらびとわが釣りあげし小鱸の白きあぎとに秋の風

吹く

伊藤左千夫

歌人

名は幸次郎

上總國生

大正二年歿
年五十

筆蹟

あたゝかき心こもれ
るふみもちて人おも
ひをればうぐひすの
なく

正岡子規

俳人

歌人

名は常規

伊豫國松山生

明治三十五年歿
年三十六



牛飼の歌よむとときに世のなかのあたらしき歌おほいに
おこる
しばらくを三間うちぬきて夜ごとく、兒らがあそぶに
家わきかへる

あつちのふもゆるゆきもろて
くおもゆるふもゆるゆきもろて

筆夫千左藤伊

縁さきに玉巻く芭蕉玉解けて五尺のみどり手水鉢をお

佐佐木信綱

國文學者

歌人

文學博士

明治五年伊勢國生

ほふ
病みふせるわが枕邊にはこびやる鉢の牡丹の花ゆれや
まず
神（神代卷）富山は空高くそよむ天照大神 佐佐木信綱
神（神代卷）富士はみそらに立たし日の大皇子國土しらすたふと
し日本（國壽の歌）

筆蹟
おともなくくれゆく
山にむかふときそい
ろに我の尊くおぼゆ
る
信綱

晩秋の大和のくにの薬師寺の塔のうへなるひとひらの雲

おともなくくれゆく
山にむかふときそい
ろに我の尊くおぼゆる
信綱

筆綱信木佐佐

與謝野寛

歌人

明治六年京都生

いかのぼりすがくしたる元朝の青空をゆき青空に鳴
いくさぶね君がひつぎを載せかへる東京灣の秋の日の
いろ (伊藤博文公を悼みて)

筆蹟
よろこびておくりは
すれどまたあはむひ
ははるけしとおもふ
さびしさ

よるこびておくりは
すれどまたあはむひ
ははるけしとおもふ
さびしさ

筆舟紫上尾

尾上柴舟

國文學者

名は八郎

東京女子高等師範學
校教授

文學博士

明治九年岡山縣津山
生

清き水ひかれる中をわたり來て月に投げたるわがとあ
みかな
立枯の林の中にひとつ星われを見るなり夕暮のみち

尾上柴舟

島木赤彦

歌人

教育者
本名久保田俊彦
長野縣上諏訪生
大正十五年歿
年五十一

島木赤彦

天つ日はおもをあぐれば面のうへに常に現しき若光か
も
夕焼空焦げきはまれる下にして氷らんとする湖のしづ
けさ

筆蹟

野分過ぎてとみに涼
しくなれりとぞ思ふ
夜なかに起きるたり
ける 赤彦

野分過ぎてとみに涼しくなれりとぞ
思ふ夜なかに起きるたりける 赤彦

島木赤彦筆

窪田空穂

歌人

名は通治
明治十年長野縣東筑
摩郡生

窪田空穂

吹く風のこよひすゞしく讀みさしの机の上にふみひる
がへす

金子薫園

歌人

名は雄太郎
明治十一年東京生

金子薫園

青潮の底にほのけきくれなるの亂ると見れば鯛とあら
はる

沈丁花春のゆふべの庭の雨につめたくにほひひろごり
にけり

牛のゆく白川みちの水車かたりことりといとまあるか
な

水車かたりことりといとまあるかな

與謝野晶子

歌人

與謝野寛の妻
明治十一年大阪府堺
市生

與謝野晶子

金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり岡のゆふ
べに

赤倉や山へひろぐる雲を切るはさみをつかふかなく
の聲

赤倉

新潟縣越後國妙高山
腹の温泉場

長塚節

歌人
小説家
茨城縣結城郡生
大正四年歿
年三十七

長塚節
麥刈ればうねまくにうちならび菽は生ひたりみな屈
まりて
柴栗の青きはあましかにかくにひとつふたつは口もて
ぞむく

筆蹟

白はにの瓶こそよけれ霧ながら朝はつめ
たき水くみにけり

節

あまのつねに
あまのつねに
あまのつねに
あまのつねに
あまのつねに

長塚節筆

前田純孝

歌人
教育者
兵庫縣生
明治四十四年歿
年三十二

前田純孝
おのづから眠足らひて乳飲兒が眼ひらくごとく春は來
にけり

前田純孝

齋藤茂吉

醫家
歌人
醫學博士
明治十五年山形縣生

野原
のどぶくろ波うたせつゝあめうしは臥して草はむ大夏

齋藤茂吉

ゆらくと朝日子あかくひむがしの海にうまれてゐた
りけるかも
ぢりくともろりに燃ゆる檜の樹の太根はつひにけむ
りあげつもの

筆蹟

高原のしづかに暮るる宵毎にともし火に
來て絶る蟲あり

茂吉

高
原
の
し
づ
か
に
暮
る
る
宵
毎
に
と
も
し
火
に
來
て
絶
る
蟲
あ
り

齋藤茂吉筆

石川啄木

新聞記者
歌人
名は一
岩手縣生
大正元年歿
年二十七

石川啄木

チャルメラ

葡萄牙語
唐人笛

Charamela



筆蹟

寝つつ讀む本の重き
につかれたる手を休
めては物を思へり

啄木

若山牧水

歌人

名は繁

宮崎縣生

昭和四年歿

年四十五

秋近し電燈の球のぬくもりのさはれば指の皮膚にした
しき
飴賣のチャルメラきけば失ひしをさなき心ひろへるご
とし

寝つつ讀む本の重きにつかれたる

手を休めては物を思へり 啄木

筆本啄川石

うすべにに葉はいちはやう萌えいでて咲かんとすなり
山櫻花
窓ひらき飯食ひ居れば初冬の朝日さし來ぬたのしかれ

若山牧水

北原白秋

詩人

歌人

名は隆吉

明治十八年福岡縣柳

河生

今日

北原白秋

大空になにもなければ入道雲むくりくと涌きにける
かも

飛びあがり宙にためらふ雀の子羽たゝきて見居りその
揺るゝ枝を

九 影

松岡讓

影は生きものである。生きものの影が生きてゐるのはいふま
でもないことながら、無生物でも影だけは必ず生きて居る。誠
に影は不思議な生きものである。
自分は子供の時から、影の中にいつもある神祕的の力を認めて

松岡讓

文學者

明治二十四年新潟縣

生

るた。殊に自分の影をじつと視つめてゐると、何とも知れない神秘感がそこにあるのだつた。子供心に影を不思議な存在であると感じたのは、自分といふものの存在を意識した時と餘り隔つてはゐないだらう。だから「三尺去つて師の影を踏ます」といふのは、少くとも自分にとつては、師に對する禮儀とか恭敬とかいふ殊更めかしき道德的の意味をもつたものとは見えなかつた。正直のところ實感があつたのである。自分はいつしか人の影を踏むことを罪惡と思ふやうになつた。意識して人の影を踏むことは彼を辱め、彼を呪ふことだつた。

凡そ影の奇怪な存在に氣づいたものは、その中に測り知られぬ想像の盛られてゐるのを感じ得るのであらう。影は彼に似て、彼ともちがつた不即不離の一人格なのである。影法師とはいみ

じくも名づけられたこの不可思議な人格の名稱ではないか。田舎に生れて、田舎に成長した自分には、少年のころの四季それぞれに影法師がいまだに懐かしい。川の土手を傳つて歸路を急ぐ時、並木の間を織つて刻々に伸びる長い影法師と共に歩くことは、獨りて寂しい田舎道を歸る少年には、涙ぐましい程な慰めであつた。自分はひとりてぶつ／＼泣いたり、口笛を吹いたりして歩いた。影も亦音こそ立てないが、自分と同じ身振をする。何といふ親しさであらう。しかし、それが伸びに伸びて、山の麓まで淡い影を流した擧句、いつの間にかやらあたりの光景が一面に薄紫に煙つて、自分の小さい姿が黄昏の中に吸込まれる時、自分はいひ知れぬ憂鬱を覺えた。さうして影法師を見失ふまで後れたことを悲しんだ。

雪の上に落ちる透きとほつた水のやうな影法師も、自分は好きであつた。霜やけてむづ／＼する手を兩脇にかゝへこんで、安つばい毛絲の襟巻を首に巻いたまゝ、二つの鼻竅から白い息を吐いて、いつまでも影を見守つたことが幾度あつたであらう。雪に映る影は、地に落ちる影にくらべて飽くまでも天上的で澄んでゐるのであつた。

晩春初夏の都會の舗道に囁きかはす影の群像に、誰か魅せられないものがある。その代りゆがめられた己の影の醜さに呆れないものがあるか。擴大された影は、時に悪魔の如く己を驚かし、時に



雪にうつる影

神の如き威嚴をもつてそゞり立つ。其の時の自分は影の足元へ投げだされた、みすぼらしい、か弱きものの表徴であるかの如き感があるだらう。高山の巔に登つたものは、雲にうつる己の影を見て、しば／＼そこに來迎の佛の姿を描き、また外道の笑に驚くのである。形は形でしかない。しかし、影は無限に伸び又縮むのである。

「形影相弔ふ」といふ句には、何と寂しいながらに親しい感じが盛られて居ることだらう。同じく「雙影相憐む」といふ句にも深い趣がある。東坡は必ず孤獨な詩人であつたであらう。影を知ることには己を知ることであつて、孤獨の人のみよくする所だからだ。影こそ其の友であり、母胎でさへもあるのである。若し己に影がなかつたら、どんなに寂しくつらいことだらう。

形影相弔ふ

雙々子立シ、形影相弔フ。

(晉の李密の陳情表)

東坡

宋の文豪蘇軾の號

シルヴェット

Silhouette

ゲーテ

Goethe (1749-1832)

人 獨逸第一の詩

シャッテンビルドニス

Schattenbildnis

自分は時々そんなことを考へる。物語の中の幽霊や妖怪變化に影のないといふことは、誠に故あることだ。影こそはこの現世と冥界とを分つ唯一の鍵ではあるまいか。

影繪のもつ不思議な盡惑シルヴェットに氣のつく人は、時にそれが遙かに寫眞以上に神秘的な何ものかを示唆することを認めるだらう。二三年前自分はゲーテの像を八十餘面も集めた本を購つたことがある。しかもその八十餘面の銅板の大半は、彼が青年時代からの影繪であつた。自分はそれらを油繪の像と比べ見て、外貌の特性をなすのにさしたる遜色がないやうに思つた。のみな



繪影のテーゲ

ファウスト

Faust ゲーテの傑作

堅白同異の辯

周の公孫龍の詭辯法

八波則吉

國文學者 第五高等學校教授 明治九年福岡縣生

燕村

與謝燕村 江戸時代の俳人畫家 天明三年(一八一三)歿 年六十八

らず神韻縹渺たる趣に至つては、むしろ影繪がファウストの作者にふさはしいやうにさへ思はれたのである。それを見ながら、自分は小さい時、好んで自分の影を仄暗い障子に映したことを想ひ出した。全く影は自分とは別な生きものなのだ。だから昔嘶にある「驢馬は賣つても影は賣らない」といふ主張は、一見堅白同異の辯に似て、其の實不思議な魅力をもつた主張ではあるまいか。(日中出現)

10 文の背景

八波 則吉

燕村翁に

春雨や小磯の小貝ぬるゝほど

といふ句があります。春雨が靜かに降つてゐる、小磯の小貝が

やつと濡れるほどといふ意味で、長閑な春雨の氣分がよく現れてゐます。しかも此の句の背景が妙です。試に「春雨や小庭の小石ぬるゝほど」とでも改めて御覽、忽ち興味索然たるものとなります。「小磯の小貝」。この僅かな文字の中に、汪洋たる大洋の一部分が「文の背景」としてほの見せてあるので、

羽蟻飛ぶや不二の裾野の小家より

といふのと同工異曲です。

蕪村翁には此の種の俳句が甚だ多い。例へば、

時鳥平安城をすぢかひに

不二一つうづみ残して若葉かな

など、何れも背景に富んだ俳句です。元來俳句に「季」といふものがある、櫻が春、時鳥が夏、鹿が秋、時雨が冬の類。此の「季」といふも

酒吞童子

丹波の大江山に棲んでゐたといふ怪盜

鳥羽殿

京都の南方下鳥羽にあつた離宮

易水

支那の河北省易州より保定府に流れる川、燕の荆軻が秦王を刺すために易水で別れゆくその時軻の歌つた歌

風蕭々トシテ易水寒シ。壯士一タビ去ツテ復還ラズ。

山家集

西行法師の歌を集めたもの

のに所謂季題趣味と名づける一種の趣味が存して、これがおのづから俳句の背景をなすのです。故に無季の俳句又は川柳に比して、俳句は先天的に背景に富んだ文學です。加ふるに、蕪村翁の如きは種々工夫を凝らして、背景に富み情趣に充ちた俳句を作つてゐるやうです。既に御氣附の方もありませんが、翁の俳句には固有名詞の讀込が非常に多い。前に掲げた句の「不二平安城」などもその適例ですが、此の外、

大和路の宮も藁屋も乙鳥つばめかな

雲の峯に肘する酒吞童子かな

鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな

易水にねぶか流るゝ寒さかな

鍋敷に山家集あり冬籠

などの如きは、或は地名、或は人名等を讀込んで、讀者の心中に地理又は歴史上の記憶を再現させて、十七字詩に無限の餘情を含ませようと工夫してあるのです。想ふに蕪村翁の俳句が子規子一派の俳人に推奨された原因の一つは、此の背景の豊かな點に存するのでせう。

先年雜誌「文藝界」が春月と題して、懸賞で和歌を募集したことがあります。其の第一等は、

荒鷺も花の木かげに眠るらむ足柄山の春の夜の月

といふのでした。荒鷺を花の木かげに眠らせた對照法も妙ですが、足柄山といふ固有名詞が此の歌の背景として非常に力強く働いてゐるではありませんか。

又數年前大阪朝日新聞の一萬號祝に懸賞で募集した和歌の第

一等は、

桐原や駒のたつ髮吹く風に甲斐が嶺かけて秋の雲飛ぶ

といふのでした。題は雲です。此の歌も大きな背景を有してゐます。

或年私は「松上鶴」といふ勅題で、如何にもして餘情の多い背景に富んだ、繪のやうな歌を作つて見ようと試みました。先づ念頭に浮んだのは、一方は渺茫たる海で、波は靜かにして眠るがごとく、他の一方は松原で、靄がかゝつて一抹の薄墨の繪。今し朝暾海上に出でなんとして東天數條の金線を走らす、時しもあれ、老鶴の一唳新春の序幕を開く……といった様な所を詠んで見ようと試みました。十月の初旬から翌年の一月十日まで約百日間、日として夜として頭を悩まさぬ暇はありませんでした。而

松上鶴
明治四十五年新年御
歌會勅題

して遂にもものになし得なかつたのです。ところが一月二十四日の早朝新聞紙上に發表された東京府平民阪本芳子さんの預選歌

寄る波のほの見えそめて明方の磯の松原鶴ぞ鳴くなる。
を見て、これなるかな。自分が此の百日、詠まんと欲して詠み得なかつた、背景に富んだ、繪のやうな歌とは正にかくの如きである。と、吾を忘れて感嘆の聲を放ちました。着想の符合とでも申しませうか、私は阪本さんに依つて私の月ごろの思想を發表して貰つたやうに嬉しかつたのです。

預選歌に就いては例年とかくの評が出ます。しかし、少くとも此の歌は近來稀に見る名歌であると思ひます。「松上鶴といへば、一羽の鶴が、一本の松で、一聲鳴いたといふ風に、只題の説明然

たる、味も品も無い駄作の多い今日、かゝる背景に富んだ、餘情あり餘韻ある歌を作つた阪本さんは、慥に歌道に一點の光明を與へたものだと思ひました。(文話鑑賞から創作へ)

一 葉書文學

小笠原長生

葉書文學……こんな熟語があるかどうかわからないが、とにかく限りある小紙面にもするので、さほどに意を用ひないから、却つてそのなかに筆者の性格が顯れ、書狀とは又別の趣味があつて存外面白いものである。

私は近頃少しく調べるこゝがあつて、數十年來保存してある葉書類を引つぱり出して見た。いや色々ながあるので、つい一枚読み二枚読みするうちに、段々興が湧いてきて、とうとう半日

小笠原長生

海軍中將

宮中顧問官

子爵

慶應三年(一五七)舊唐津藩主の家に生れた

八代海軍大佐
名は六郎
後に海軍大將
樞密顧問官
男爵
昭和五年薨
年七十

八艘
小樽丸
愛國丸
朝顔丸
遠江丸
相模丸
三河丸
佐倉丸
江戸丸



八代海軍大佐 佐倉六郎

費してしまつた。決して押賣するわけでは無いが、其の中から二三拾ひ出してお目に懸けよう。

最初に掲げるのは、對露戦役の勞頭、一管の尺八に、風流艦長の名を擅にした淺間艦長八代海軍大佐が、同戦役中、明治三十七年五月二十九日旅順沖から寄せられたものである。音に名高い旅順口の閉塞、前後三回決行せられた中でも最も壯烈

白石
海軍大尉白石霞江
閉塞船佐倉丸の指揮官

布哇事件
明治二十六年に於ける布哇の革命

天女丸
名刀の名

られた白石大尉以下の一隊は、悉く名譽の戦死を遂げて、一人も生還したものが無かつたのである。

平素より、熱情火の如き八代艦長の性格を熟知してゐる私は、彼がいかに悶々の情に驅られてゐるかを察してゐた。殊に閉塞決行の直後、淺間の者一人も還らず、予は待つとの悲壯な彼の書狀に接してゐた私は、即日愚見を開陳したる長文の返書を出した。葉書といふのは、此の返書に對する再度の文通なので、それはかうである。

十九日附朶雲拜仰、御芳志感謝。「職務に忠ならんことを期し、生死を度外に置く。」とは毎々小生が部下に訓示せるところ、然るに、今貴兄より此身に下示せらる、痛み入りたり。布哇事件の時、君が賜はりたる「天女丸」は白石に贈り候。書籍澤山あり

即興詩人
アンデルセンの作
鴨外漁史の譯

がたし。無念遣る方なき時、即興詩人を讀み、慰む。敬具。
百餘字中に、熱誠も、義烈も、籠められて、東洋的英雄の風格が、其の間に躍如として居るではないか。

圖們江
朝鮮の北境を東に流れて日本海に注ぐ川
又豆滿江

圖們江畔秋深うして、敵の山も味方の山も、いかにもうつくしく紅葉して居ります。わたくしの山は、松檜どろかしばみなど、で、つぎはぎの錦ですから、

山姫も姥となつたかこの山はつぎされもありはぎされもあり

どうやら天長節は日本で祝する事が出来さうでございませう。かういふしをらしい文句で、しかも月下哨戒の圖まで淡彩で描かれた葉書が、大本營の私の許に配達せられた。で、差出人はと

姥

謡曲に「山姥」といふ鬼女を主人公にしたもの

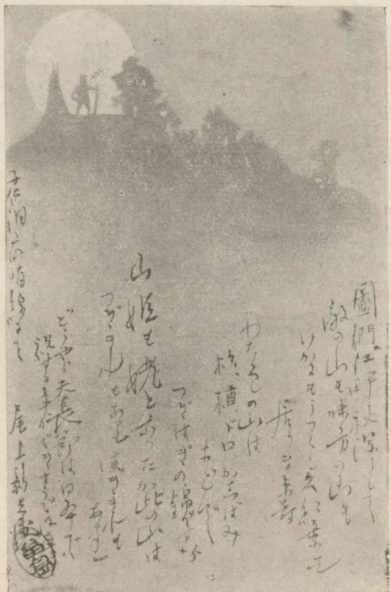
尾上新兵衛
久留島武彦の雅名

表面を見ると、

北關出征後備歩兵第三十二聯隊第二大隊本部久留島一等計
手
とある。これぞ尾上新兵衛の假名を以て久しく文壇に覇を稱へ、現今は少年團の大立物として海外にまで鳴響いてゐる久留島君が、筆を投じて戎軒を事とし、文士のために、萬丈の氣を吐き、北韓の天地を睥睨すること一年有餘に及んでの述懐である。と知つては、洵に滿腔の敬意を表せざるを得ない。就中最後の、どうやら天長節は日本で祝す

筆を投じて戎軒を事とし

唐の名臣魏徴の述懐の詩の一句



月下哨戒

山姥
 曲舞の曲
 謠曲にもある
 「よしあしびきの山姥が山巡するぞ苦しき」

大町桂月
 國文學者
 名は芳衛
 高知縣生
 大正十四年歿
 年五十七
 杉浦重剛
 教育家
 宮内省御用掛
 日本中學校校長
 稱好塾主
 大正十三年卒
 年七十一

る事が出来さうでございます。の一節に、人間味が横溢してゐる。山姥の申し兒のやうに、高い場所さへ見れば、食指動いて勘辨なりがたく、山といふ山、峯といふ峯を片端から踏破した擧句、此處だ、此處だと打込んで、御輿を据ゑたのが青森十和田の山中にある、葛温泉、降積む雪にほくそゑんで、錦心繡口を恣にし、此處に終焉をとり、遺骨を埋め、記念碑まで建てられたのが、文豪大町桂月君であつた。

私は大正四年五月二十九日、桂月君と共に文部省から大禮奉祝唱歌歌詞審査委員を囑託せられたので、會議の席上で度々意見を闘はした。又一方では、其の當時、同君の恩師たる杉浦重剛翁と共に東宮御學問所に出仕してゐたので、それやこれやの關係

から、一層親しくなつた。爾來同君は登山の折々よく葉書を送られた。今其の中から葛温泉の分を一つ掲げて見よう。これはたしか大正十二年であつたらう、四月二十三日の日附になつてゐる。

都の花は散り候ひぬらん。奥州の山嶽はすべてみな雪を帯び居り申候。その雪堅くして足陥らず、足を遮るものもなく、峯より峯へと横斷縦走自由自在、恰も偉人の天下を濶歩する如くに候

何處となく垢抜けがして、やはりうまいなと頷かれる。今や君も逝かれた、杉浦翁も逝かれた。さうして私の手許には、君が猪狩史山氏と共に心血を濺いで著述せられた「杉浦重剛先生」が遺されてある。

（鐵櫻春うらゝか）
 隨筆

猪狩史山
 教育家
 史學者
 名は又藏
 日本中學校長
 明治六年福島縣生

二月朔

源平の三烈士

室鳩巢

室鳩巢
徳川幕府の儒者
名は直清
享保十九年(三九四)卒
年七十七

盛衰榮枯は世の常なり。それによりて志を變へぬは士の常なり。若し時の模様につきて覺悟を變じ、世話にいふ襟元につくやうにては、何を以て士と謂ふべき。

水邊楊柳綠煙絲。立馬煩君折一枝。

唯有春風最相惜。慇懃更向手中吹。

これ唐の楊巨源が楊柳の詩なり。此の三四の句、意婉にしておもしろく覺ゆ。よりて聊か其の意を詠める。

春風

楊柳の人に折られて、はや樹を離れたりとて、春風のそれをよそ

にして吹きなば、いかに情なかるべきを、なほその手折られたる手を去りやらで、惜しみがほに吹くこそいとやさしく覺ゆれ。いにしへより忠臣義士の、盛衰存亡をもてその心を變へぬに喩へつべし。

余むかし源平盛衰記を讀みて、源氏の士には渡邊瀧口競、平家の士には彌平兵衛宗清が事に感ぜしが、また東鑑にて伊東九郎祐清が事を見て感じけるまゝ、三烈士の傳を撰び置きしが、いまだ稿を脱せざるうちに池魚の禍にかゝり、其の後ふたゝび草を起すこともなくうちすぎしほどに、いまはその文をば跡もなく忘れつ。
渡邊競は源三位入道頼政が所従の士には第一のものなり。然

一二 源平の三烈士

三

東鑑

五十二卷
鎌倉將軍六代の間の
記録

池魚の禍

火災
城門火ヲ失シ、禍池
魚ニ及ブ。(呂氏春秋)

源三位頼政

仲政の子
射をよくし兼ねて和
歌に長じてゐた
安徳天皇の治承四年
(八四〇)平家を滅さう
として敗れ宇治の平
等院で自殺した
年七十七

高倉宮

以仁王

後白河天皇の皇子

治承四年薨去

御年三十

三井寺

園城寺

滋賀縣大津市琵琶湖

畔にある名刹

天台宗寺門派の本山

六波羅

平氏の六波羅殿

京都市東山區六波羅

寺方廣寺の附近がそ

の址である

大將

右近衛大將平宗盛

るに治承年中頼政高倉宮に勸めて兵を起しし時、急に京都を發して倉皇として三井寺に赴きしが、うち忘れてやありけん、競にかくと知らせざりしほどに、競しばらく猶豫して家にありしを、平宗盛聞きて、日頃競が魁偉なるを見て己が所從にせまほしく思ひしが、頼政が親臣なれば請ふべきやうもなかりしに、このたび競ひとり都に残れりと聞きて、六波羅へ參れ。と人して言はせければ、參りたり。宗盛對面して、汝今より我に仕へなば、入道の恩にはまさるべし。とて、小槽毛といふ馬に具鞍おき、乗替の料とて遠山といふ馬をひきそへ、黒絲をどしの鎧兜まで皆具してたびけり。競畏まり賜はりて、ほくそ笑ひして罷り歸りぬ。一族家人打寄りて、入道殿これほどの大事を思ひ立ち給ふに、ひとり取殘されしは、眞實に遺恨なり。大將のかく懇に語らひたまふ

は、いなみがたし。『時の花をかざしにせよ。』といふこともあれば、



源平盛衰記圖會 渡邊競

たゞこのまゝにてあれかし。といふを、競「いや」とよ、勇士の義さはあらず。とて、宗盛よりたびける鎧着て、小槽毛に乗り、郎等七騎打連れて三井寺へと打出でしが、六波羅の門前を通りしとき、馬に乗りながら門の内へのぞきつゝ、高聲に言ひいれけるは、競こそ只今下し賜はりつる馬に乗り、三井寺へ罷り越し候へ。御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れ難く候へば、この

宇治橋

宇治川にかけわたして京都府山城國久世郡宇治町と宇治郡宇治村とを連絡する橋

老尼

池の尼
清盛の繼母
頼盛の生母

たび死を共に致すにて候。御門前を空しく打過ぎんは本意なく候へば、御暇を申し候。とて、三井寺に至り、頼政と一所になりたりしが、其の後宇治橋の合戦に討死してけり。

彌平兵衛宗清は平頼盛の士なり。平治の亂に、頼朝幼少にて、頼盛の家に囚はれしを、頼盛の母老尼、清盛に乞ひてこれを救ひけり。そのとき宗清、頼朝を朝夕に勞りしが、平家西國へ落ちし時、頼朝かねて頼盛に通問して疎念なき由を言はせける程に、頼盛ひとり一門に叛きて都に留りけり。その後平家未だ亡びずして西海にありし時、頼朝舊恩を謝せんがために、頼盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必ず召具せらるべき由を言ひおこせられければ、頼盛關東に赴くとて、宗清に、「いざ連れて下らん」と言ひしに、宗

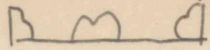
祐親

伊東氏
祐家の子
伊豆の河津の莊に居て河津次郎と稱した
壽永元年（一一八二）自殺した

清言ひけるは、頼朝某に下れと候は、定めて昔のなじみを思ひ出でて、所領引出物などして、そのかみ扶助せし勞を報ぜんとの事にてあるべく候。今更源氏に諂ひて、その蔭に依り候はんは、西海にある朋友どもの承る所も口惜しうこそ候へ。君はかくて都に御安堵おはしまし候へども、御一門はいづれも西海に流落し給ひ、日夜安き御心もあるまじく候。こゝにて思ひやり奉るも痛はしくこそ候へ。鎌倉に御越し候うて、頼朝某が事を尋ねられ候はば、折節勞はることある由を仰せられて給はり候へ。とて、鎌倉へは行かざりけり。その後、西海へ下りけるにや。その終を知らず。

伊東祐清は祐親が第二子なり。頼朝伊豆に流謫せられし時、祐

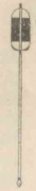
おふどの
すそに金を
うつつもり



裾濃
鍔のをどしの色の上
が白くて下になるほ
ど色を濃くぼかした
もの
五枚兜
しころの五枚になつ
てゐる兜

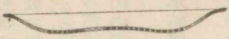


鍔形
兜の庇の上に立つて
ゐる角のやうなもの
大申黒の矢
鷲の羽の上下は白く
中ほどの黒い部分の
廣いので作つた矢



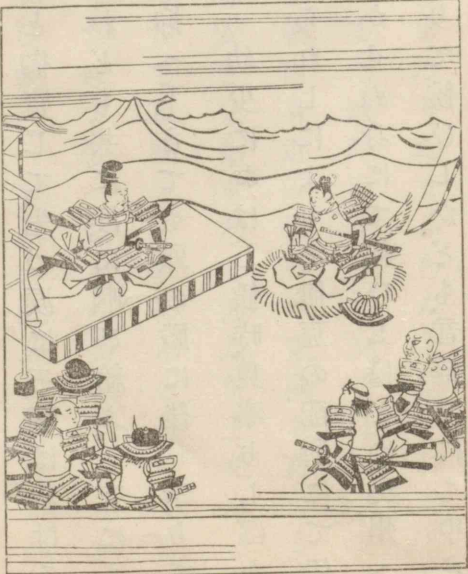
に白印にておはしまし候は、誰人にて渡らせ候ぞ。『假名實名を
慥に承り候へ。』と鎌倉殿の仰にて候。と申しければ、其の中に二十
四五ばかりなる男の色白く尋常なるが、赤地の錦の直垂に、紫裾
濃の鍔の裾金物うちたるを着、白星の五枚兜に鍔形うちて、猪頸
に着、大申黒の矢負ひ、滋藤の弓持ちて、黒き馬の太く逞しきに乗
りたるが、歩ませ出でて申されけるは、鎌倉殿もしろしめされて
候。童名は牛若と申し候ひしが、近年奥州に下向仕り候うて居
候ひ、つるが、御謀叛の由承り、夜を日に繼ぎて馳参じて候。見参
に入れてたび候へ。と仰せられければ、堀彌太郎、さては御兄弟に
てまし〜けりと、馬より飛んで下り、御曹司の乳母子佐藤三郎
を呼出して、色代あり。彌太郎、一町ばかり馬を牽かせけり。
かくて佐殿の御前に参り、此の由を申し上げければ、佐殿は善悪

滋藤の弓
下地を黒塗にし籐を
繁く巻いた弓



佐藤三郎
名は嗣信
同四郎
佐藤四郎忠信
伊勢三郎
名は義盛

に騒がぬ人にておはしけるが、今度は殊の外嬉しげにて、さらば、
是へおはしまし候へ。見参せん。とのたまへば、彌太郎やがて参
り、御曹司に、此の由を申す。
御曹司、大きに悦び、急ぎ参
り給ふ。佐藤三郎、同四郎、
伊勢三郎、これら三騎召連
れて参らる。
佐殿御陣と申すは、大幕百
八十張ひきたりければ、そ
の内は、八箇國の大名、小名並みゐたり、各、敷皮にてぞありける。
佐殿御座敷には、疊一疊敷きたれども、佐殿も敷皮にぞおはしけ
る。御曹司兜を脱ぎて、童に持たせ、弓取直し、幕のきはに畏まり



朝頼と義経の對面
義経の對面

てぞおはしける。その時、佐殿敷皮を去り、我が身は疊にぞ直られける。「それへそれへ」とぞ仰せらるゝ。暫く辭退して敷皮にぞなほられける。

佐殿は御曹司をつくらんと御覽じて、先づ涙にぞ咽ばれける。

御曹司もそのいろは知らねども、共に涙に咽び給ふ。互に心のゆく程泣きて後、佐殿涙を抑へて、さても頭の殿に後れ奉りて、その後、御行方を承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝、池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて伊東・北條に守護せられ、心にまかせぬ身にて候ひしほどに、奥州へ御下向のよしは、かすかに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと思召し忘れ候はて、取敢へず御上り候こと、申し盡くし難く悦び入り候。これ御覽候へ。かゝる大事をこそ思

頭の殿

左馬頭源義朝

池の尼

平忠盛の後妻

清盛の繼母

伊豆の配所

田方郡蛸が島

葦山の近く

伊東

伊東祐親

北條

北條時政

八幡殿

八幡太郎源義家

栗屋川

今尉川と書く

盛岡市の西郊

ひ企てて候へ。八箇國の人々を初として候へども、皆他人なれば、身の一大事を申し合はする人もなし、みな平家に相従ひたる人々なれば、頼朝が弱げをまぼりたまふらんと思へば、夜も夜もすがら平家の事のみ思ひ、また或時は、平家の討手上せばやと思へども、身はひとりなり、頼朝自身進み候へば、東國おぼつかなし、代官を上せんとすれば、心安き兄弟もなし、他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それも叶ひ難く、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿よみがへられ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。我等が祖先八幡殿の後三年の合戦に、むなうの城を攻められしに、多勢皆滅されて無勢になりて、栗屋川のはたにおし下りて、幣帛を捧げて、王城を伏拜み、南無八幡大菩薩、御擁護をあらためず、今度の壽命を助けて本意を

刑部丞
新羅三郎源義光

魚と水との如く
孤ノ孔明アルハ、猶
魚ノ水アルガゴトシ。
(蜀志)

山科
今の京都市東山區山
科

遂げさせてたべ。」と祈誓せられければ、まことに八幡大菩薩の感
應にやありけん、都におはする御弟刑部丞は内裏に候ひけるが、
俄に内裏を紛れ出で、奥州の覺束なきとて、二百餘騎にて下られ
ける路次にて勢打ちくは、り、三千餘騎にて栗屋川に馳來て、八
幡殿と一つになりて、つひに奥州を從へたまひける、その時の御
心も、頼朝御邊を待ちえ參らせたる心に、いかでかまさるべき。
今日より後は魚と水との如くにして、先祖の恥を雪ぎ、亡魂の憤
を休めん。」と宣ひもあへず涙を流したまひけり。御曹司は、とか
くの返事なくして、袂をぞ絞られける。これを見て大名、小名、互
の心の中推量られて、みな袖をぞ濡されける。
しばらくありて、御曹司申されけるは、おほせのごとく、幼少の時
御目に懸りて候ひけるやらん。配所へ御下りの後は、義經も山

鞍馬
京都の北方の山

秀衡
陸奥田羽押領使藤原
秀衡

萩原井泉水

伊人
名は藤吉
明治十七年東京生
梓川
長野縣上高地から流
れ出て犀川に合する
川

科に候ひしが、七歳の時鞍馬へまゐり、十六まで形の如く學問を
仕り、さては京都に候ひしが、内々平家方便を作るよし承り候間、
奥州に下向仕りて秀衡を頼み候ひつるが、御謀叛のよし承りて
取敢へず馳せまゐる。今は君を見奉り候へば、故頭の殿の御見
參に入り候心地してこそ候へ。命をば故頭の殿にまゐらせ候。
身をば君にまゐらす上は、いかゞ仰に従ひまゐらせでは候べ
き。」と申しも敢へず、涙を流したまひけるこそあはれなれ。さて
こそ、この御曹司を大將軍にて上せたまひけれ。(義經記)

一四山の池

萩原井泉水

眞白にさらされた石を敷きつめた廣い河原の中に、水とも思は
れぬやうなねつとりとした碧さを以て流れてゐる――それが梓

日本アルプス
信濃飛騨越中に連な
る山々を歐洲のアル
プスに比していふ

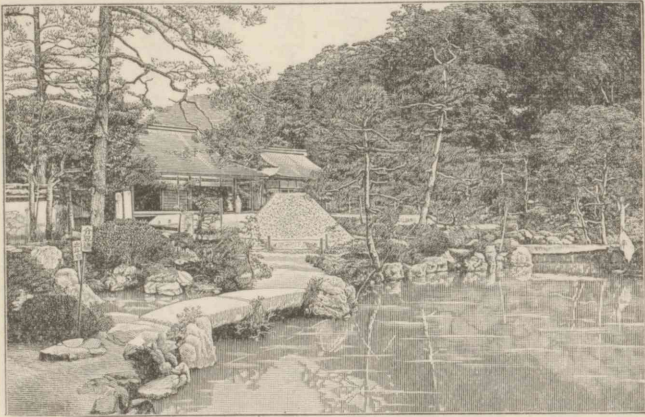
川だつた。長い丸木を寄せてつないだ橋を渡つた。白樺の林の薄ぐらゐ程の小路をゆくと、小さな祠があつて、その後にはほのぼのとした水が湛ひてある。それが明神の池だつた。お、それは何と美しい恐らくは「美しい」といふ言葉をもも純粹な意味に於て用ひ得る、他に餘り例のない所のものだらう。日本アルプスの稜々とした豪快な輪郭の中に、是程に整々とした織麗な結構なものがあらうとは全く思ひがけないものだつた。虚空に聳える巖々とした連峯は固より神の大きな創作に違ひない



明神池

相阿彌
室町時代の畫家
茶道や庭の事にも通
じてゐた

小堀遠州
小堀遠江守政一
江戸時代の茶道及び
庭作の大家
正保四年(1651)辛
年六十九



相阿彌好都京
彌都京
好都京
彌都京
好都京
彌都京
好都京
彌都京

けれども、此の山の懐にある數奇を凝らしたやうな一つの池こそ神の藝術——神の詩に外ならぬ。此の池を見てすぐに感じたことは、それは相阿彌か小堀遠州の庭だといふことだつた。相阿彌や遠州が幾多の庭を作る時には、或程度までは自然の寫生もあつたけれども、大部分は彼の構想である、彼自身が求めてゐた美しさといふものを、土と水と岩と木とを以て創りあげるので。それを京都の古い寺に於ける名園として私は常に感嘆してゐる。しかもそれが、それよ

石楠花



なゝかまど



りも完全に、ちやんとこゝに神の手に依つて作られてゐるではないか。——彼等は勿論、此の地などへ脚を踏込んだことはない。——此の事は相阿彌や遠州が神の意匠に接近し得るほどに偉大なる天才だつたともいへるし、又、あらゆることに「人工」といふものの價値はない、「人工」はそれをどんなに巧にしても、其の巧に美しさがある限りは、やはり「天工」の縮圖に過ぎないといふ意味で、神の意匠の無限的なる大いさに頭が下るともいへる。池の水は清冽そのものだつた、池のふちまで迫つて滴りかゝる山が、ずつぱりと其の縁を涵してゐた。水の中には飛びくゝに、好き程の位置に、小さな島が置かれてあり、その一つくゝに、或は落葉松、或は白樺、或は石楠花、或はなゝかまどが生えてゐた。島は大きな岩で出来てゐるものもある。水には黒い鯉のやうな魚が透

けて泳いでゐる、如何にも原始的なる悠々乎とした感じである。大きなものは尺に餘つて見える。それは、岩魚だつた。此の魚を釣るには、自分の影を見せてはならないさうだ。人間の影を非常に嫌ふといふ此の魚こそ何と太古的なる奴てはないか。

田代原にある田代池といふも一見して過ぎた。明神池よりも小さくて浅い感じであるが、明神池と同じやうな浮島がいくつもあつて、それに直線的な木が立つてゐた。



田代池

燒岳
長野縣信濃國の西部
に峙つ火山

此の池の水からもやが立つてゐた。それは水の極めてつめたい爲に起る朝毎の現象らしいが、水ともやともやと木々と、而して又木々と水とが一つの模糊としたものに融合つて、靜かに動いてゐる感じは、自然がまだ朝の眠から覺めきれずに快く淡い夢を見てゐるやうであつた。けれども、はやだんくんに水から離れて行つた。その水の上には藻の花がかたまつて咲いてゐた。暫く降つて、薄く積んだ淡雪のやうに――。

それからの道には落葉松、榎などが多かつた。それが痛ましく、焼かれて枯立つてゐた。大正何年かに燒岳が大噴火をした時に火を被つて枯れたのである。その凄絶を極めたであらう有様は、關東の大震火を眼のあたりに見てゐる私にも想像がつかなかつた。又、今は靜寂そのものである此の高原が一度はさう



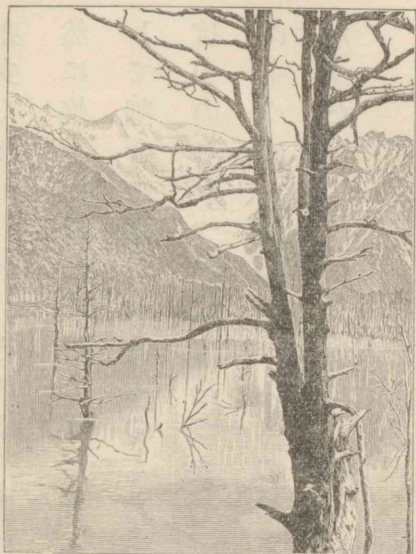
狩野光雅筆

大正池

した焦熱の洗禮を受けたのであるかと思ふと、敬虔な氣持にさ
そはれた。枯立つてゐる木の中に青々と高く茂つてゐる木も
亦少くなかつた。それは一概に熱火に逢つたといふ中でも、偶
然に焰を直接に受けなかつたものもあらうし、木の質が火に對
して割合に強かつたものもあらうし、又木の齡が壯であつて抵
抗力の多かつた爲もあつたのであらう、かうした木の一つ／＼
にも、やはり運命といふものがあると、そんな事も考へられるの
だつた。

やがて私は大正池のほとりに出た。大きな鏡のやうに磨ぎす
まされた水面——それは凡ての物の姿を映すけれども、何一つ
に染汚されなまいといふ魂のやうな大いさだつた。水面からは、

枯れた木が幹を立ててゐた。此の池は燒岳の噴火した際に熔岩が梓川の流を塞いだので、水が溢れて溜つて、それ以來形づくられたものだといふ。水の中に枯木が立つてゐるのも、その爲



なのだ。だが、是等の枯木にも、あたりの景色にも、死とか大「苦しみ」とかいふ感じは少し正もなかつた。知識的に考へ池て見てこそ地獄的の災禍を思はせられるもの、その枯木の一つ／＼の落葉松や白樺には、全く静かな安らかさが感じられた。死滅の相を越えて、涅槃の世界に入つたものの如き姿だつた。折から、燒岳の上半

穂高

長野縣信濃國の西部に峙つ高山

楨有恆

登山家
明治二十七年宮城縣仙臺市生
アルプス
歐洲の最大山系
西北はフランス・ドイツ・スウイス南はイタリアに跨つてゐる
Alps

腹にかけて、朝日の光が鮮かにさして來た。燒岳はくつきりと其の全容を池の中にひたすのだつた。一方には、穂高も亦ひえびえとした其の影を水の鏡にうつしてゐた。日はだん／＼に高く、空が輝いてくるにつれて水の面も亦光を増して行く——寂光！ 私は此の言葉の最も好く具體化されたものを、今眼前に拜むやうな氣持がした。——鶯が、あゝ鶯がその玉を轉ずる如き聲。(山水大觀)

一五 アルプスの夏

楨 有 恆

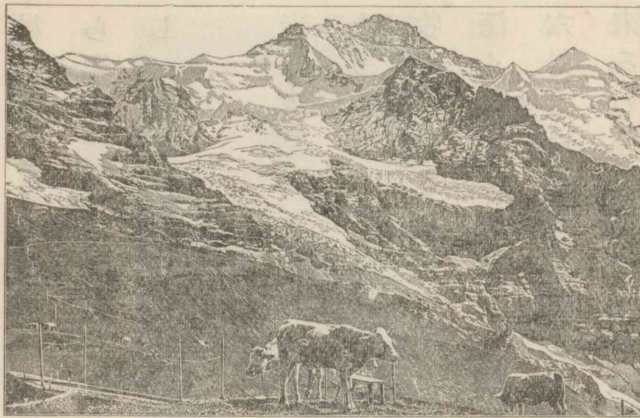
初夏の滴る喜を心行くばかり吸はうとするならば、アルプスまで登らなければならぬ。アルプスは見果てのつかぬお花畑の夢幻郷だ。足の踏み所もない程に咲く草花に身を横たへて雪

サン、ミカエル祭
Saint Michaelmas Day
九月二十九日
に行はれるロ
ーマ教會の一
大祭

山を仰いでみると、森ばたに栗鼠が音を立ててゐる。誠實な生活のかはいらしい音だ。牛の群が又登つて来る。アルプスの草を追うて村から来るのである。一體アルプスといふ語は、土地の人たちには夏期に放牧する雪線以下の山麓を意味するものなのである。山の裾の村人は、生活の必要物として牛や羊を持つ。主として牛が大多数を占めてゐるが、數多く持つてゐる者もあれば、又少いものもある。何れにしても、彼等は晩春から雪の降りだす九月下旬、大抵九月廿九日のサン、ミカエル祭を最終として、各自所有の頭數だけ此のアルプスに牛を放牧するこゝとが出来ゝる。

山村が積雪から自由になつて、山麓にも若芽が萌える五月の下旬、長らく待焦れたアルプス行の日が来る。其の日には、牧夫は

エーデルヴァイス
Edelweiss
高山植物の一種
みやまうすゆき
さう



黒の天鵞絨に赤縁を取つたチョッキを身に着け、皮の帽子を被つて先頭に立つ。次に山羊が二三頭續き、その後、年長の牛が大鈴を頸に下げて續く。此の鈴は農夫が家寶として誇るものであつて、古いものになると中世紀頃のものがある。大きいのは直徑二十五糎もあつて、多くは眞鍮で出来てゐる。外側にはエーデルヴァイスの浮彫などがあつて、一種の風韻を具へてゐる。それを幅二十五糎もある厚い皮の帯に下げて牛の頸に懸ける。

此の先達牛の後に、十頭も二十頭も牛が續く、此の頃になると、村の道は毎日此の牛連れの行列で賑はひ、鈴の音は朝まだきから響き渡る。そして牧夫や牧童は紐の長い鞭を高く空に鳴らして、道草を食ふ牛どもを促して登つて行く。

青い空を戴き、雪の連峯を前にして、お花畑の上に、歌つたり想つたりしてゐることの美しい時よ。谷よりそよぐ風は遙かなる牧童の歌を夢幻の中に送り、山々は険しい面持をもつて人の胸深く刺す。何といふ莊嚴な造化であらう。

六月もなかばを過ぎ、アルプスを渡る風の烈しさもやはらいで來ると、峠の茶屋や展望の山のホテルなどは一齊に戸を開き、竈の煙を揚げて訪ふ人を待つ。登山鐵道も山麓の傾斜面を這ひ

ルックサック 獨逸語で背囊の義
Rucksack 登山に用ひる雜囊
Alpenrose アルペンローゼ

だして上下する。ルックサックをになつた男女の群は、アルペンローゼを帽や胸にかざして峠から峠へとうたつてある。みな強い高山の氣に打たれて、腕も顔も赭い。アルペンローゼに二種類あるが、いづれも赤い花の咲く石楠花である。二つと



山登スアルプ

も殆ど同じ様なであるが、

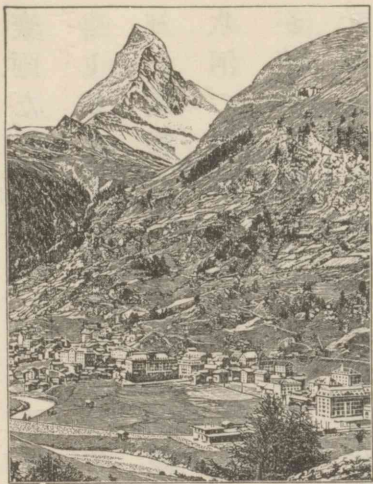
一方の葉は緑が若く、毛を持つてゐて、花が早く咲く。雪の高嶺の裾、あらくししい斷崖の端のあたりにむらがり咲く此の可憐な花は、まことに詩に賦せられ歌に詠まるべき、うつくしい姫君

ティロール
オーストリアの
最西部の州の名
東アルプス一帯
の地方

である。しかも、ローゼとはいひながら、刺す荊も無ければ、平地の人に狎れて養はれる媚も持たぬ。何時も胸深く悲しみを秘めてゐる。そして人の世に植ゑかへられると、愛撫の日をも喜ばず、異郷の土に故郷の山を想うてこがれ死にする。たゞ山にある日のみ彼の花に幸は深く、清い大氣を吸うて美はしい面をかざしてゐる。

櫻かざして若人の幸を歌うた昔もなつかしいが、ティロール帽に挿した一枝のアルペンローゼに命の喜を思うて山路を歩むのも楽しい。
日影が北面の峯からたゞ全く逃れて、朝から谷一面に照りつけるやうになれば、牧草も林も新緑が燃えるやうな瑞々しさになる。天鵞絨の如くアルプスを蔽ふ牧場の緑に見入つてゐる日は限

フェーン
三四月頃及び十
月頃アルプスに
吹く強風



アルプスの高峯マテホルン

りなく麗しい。何處を見ても荒廢の跡がない。滴るやうな若さだ。併し黄金の光の雨が降る日のみではない。地上が餘りに甘い喜に浸る時は、自然は必ず肩を聳かし、聲を怒らかして威厳を示す。フェーンの疾風に乗つた雲の群が峯に溢れて狂ひ叫ぶ時は、我等は命懸けだ。たゞ其の狂暴な意志の奔放を、小さくなつて見守つてゐるより仕方がない。しかし、夏の間山村を一しきり揺がして忘れたやうに通る過ぎる驟雨は、倦怠を掃ひ去つてくれる。

夕立雲は、前山の頂に涌きあがつたかと思ふ間に、雪の山に當つ

て巻きかへる。今まで陽氣であつた谷も光を失つて、空の御機嫌を伺つてゐるやうだ。その内に恐しく強い雷鳴が、峯から峯へ、崖から崖へと縦横に駈廻つて轟く。豪雨だ。見る間に、雲の下にあらはれた崖に大きな瀑布が幾筋もしぶきを飛ばして、どろ／＼と落下する。山おろしの風が颯颯と唐檜の森や村の上を渡る頃は、雨しぶきも薄らいで、雷鳴は氷河の奥の方で迷つてゐる。谷には霧が昇騰し始める。小鳥が待ちかねたやうに囀る。驟雨は過ぎたのだ。雲の間から日光が矢のやうに射て、牧場を照らす。緑の焰だ。瀑布も細つて跡がまた消える。農家からは紫煙が緩やかにのぼる。忠實な妻女が夫や子供の夕食の支度をしてゐるのであらう。雨後の空氣は十分に濕氣を含んで柔かい。しかも爽かな匂が溢れる。

エーテヤ
Ather
氣

若芽の香、靜寂な森のつく呼吸^いはちきれさうな土の誘惑、そのエーテヤの中を、美しい小鳥の聲と牛の鈴の音とが天使の歌のやうに舞ふ。

日は西の山に没した。川霧は立昇つて何處よりともなく集り、森の上にたなびく。谷と村とは靜かな暮の藍色が濃くなつて行く。その時である、頂といふ頂が悉く日を浴びて赫々と燃えるのは、焰なき、熱なき火だ。目が覺めるやうな透明な赤だ。微動すらしなない沈みきつた色だ。その赤が次第に下から昇る紫に追はれて行く。そして紫より藍へと移つて、遂には頂の一點のみが映える。

喜より沈思に、そして遂にメランコリヤに移るのが山の夕映である。(山行)

Melancholia
憂鬱症
メランコリヤ

Hannibal

ハンニバル

Hannibal (前247-183) 將
カルタゴの名

矢野龍溪

名は文雄
全權公使諸陵頭等に
歴任した
豊後國佐伯生
昭和六年薨
年八十二

Roma (Rome)

諸邦
亞細亞諸邦

一六 ハンニバル

矢野龍溪

英雄の成敗は千古傷心のこと少くも、少からずと雖も、東西古今を通じてハンニバルの事の如く悲しきはあらざるなり。幼齡九歳の彼が、其の父に伴なはれて神の卓前に立ち、國讐たるローマを畢生の敵とすべきを誓はしめられたるより、其の終焉に至るまで、一念常に國讐を報ずるに非ざるものなし。彼は二十七歳、人生の花とも稱すべき時、大兵を帥ゐて敵國に侵入せしより以來、十六年、苦を兵間に積み、曾て人生室家の樂しみを享けたる跡なし。大功成るに垂んとして、果さず、ローマに窮追せられて諸邦の朝廷に流寓し、終に毒を仰いで斃る。嗚呼、人生の慘なる、復此の人の如きを見ざるなり。

カルタゴ
Carthago
(Charthage)

若し彼をして尋常人ならしめば、亦深く悲しむに足るものなし。然れども、其の用兵の略は優に古今名將の上に出で、外交に敏に、政務に達し、賢に禮し、士に下り、學を好み、民を愛す。彼は武ありて文なき粗暴家に非ず、文ありて武なき文弱人に非ず、人格上一點の非議すべき所なく、而してその末路かくの如し。是、特に人をして傷心に勝へざらしむる所以なり。

地中海を隔てて南北に對峙するもの、ローマとカルタゴの二共和國なり。天は兩雄邦の並立を許さず、彼滅びずんば此興らず、彼衰へずんば此盛ならず。ロー人は戰鬪を事とする尙武の民なり、カ人は貿易を主とする平和の民なり。カ人をして口兵と戰はしむるは、羊を驅つて狼に向はしむるが如し。況んやハンニバルの事に當りしは、既に其の國が一たび痛撃を受けたる後な

イスパニヤ

España
(Spain)

ピレネー

Pyrenees



ルバニンハ

るをや。本國人の頼むに足らざるを知り、乃父の遺志を繼いで兵を屬領に募り、これを以て強敵に當らんとす、事固より既に非なり。彼豈これを知らざらんや。知つて而して是に出づる、また實に勢の已むを得ざるものあればなり。

過ぎ了へしとき、其の兵已に四分の一に減ず。彼がローマの北野に進みし時は、見兵僅かに二萬五千に過ぎざるなり。其の途上に於て兵士の怨嗟を聞くや、彼は寛大にも軍中に令して曰く、峻嶺を越え、アルプスの難路を

ゴール
Gaul

「去らんと欲するものは去れ、従ふことを樂しむものは來れ」と。此の時に當りて將軍を棄てんとするもの數千人ありきと雖も、なほ二萬餘の兵は死生を共にせんことを誓へり。而して其の兵はイスパニヤ及びゴール北部諸種の蠻族より組成せるもののみ。決して夫の愛國心燃ゆるが如き口兵の比にあらざるなり。蕪雜烏合の此の兵に對して、恩威の大なるものあるにあらざるよりは、焉んぞよくかくの如くなるを得んや。古今偉功を奏せし將帥を見るに、其の兵士は多く統一せる國民にして、愛國心あるものにあらざるはなし。唯それハンニバルに至つては、即ち然らず。其の將士は其の將軍に對して、單に恩威を感じずるのみ、實に愛國の要素を缺けり。此の異様の兵を以て、彼の將來に印度以西を統一すべき運命を荷なへる勇壯絶倫愛國無雙の口

アレクサンドル
Alexander the Great (前356-323) マケドニヤ王

フレデリック
Frederick the Great (1712-1786) プロシヤ王

ナポレオン
Napoleon Bonaparte (1769-1821) フランス皇帝

カンネーの大戦
カンネーは古代イタリヤの首府リヤ州の首府前二一六年ハンニバルは四萬の兵を以て八萬餘の羅馬軍を此處に破つた

羅馬人に敵對し、一たびは幾ど之を壓服せんとしたるなり。嗚呼、此の人の外、千古復此の人あらんや。獨り人品のみならず、其の戰鬪に長ずること亦古今無雙なり。アレクサンドル・フレデリック・ナポレオンと雖も其の上に出づるを得ず。是余の私評に非ず、歐洲史家の通論なり。我が兵と敵兵と強弱勇怯既に懸絶せるのみならず、敵は毎に大兵にして、我は毎に寡兵なり。然るに猶奇戰には謀略を用ひ、正戰には戰術を用ふ。有名なるカンネーの大戦を見よ。彼の兵數は敵軍の半ばにも當らざりしに非ずや。しかも堂々たる正戰に於て、彼は巧妙なる戰術を用ひ、敵軍をして七萬の死屍を戰地に遺して潰敗せしめたり。かくの如き全勝は、歴史上實に希有の事なりとす。戰地に斃れたるローマ貴族の指より集めたる金の指

環數斛を彼の使が本國に齎し歸りてこれを國會に示せる時、其の國人の驚喜は幾何なり。此の大勝に乗じて直にローマを衝かざりしは、後人の憾むる所なりと雖も、其の兵やもと甚だ多からず、加ふるに戦後の疲憊を以てす、此の危道を行かずとも、一方にてイタリヤ南部の城邑は皆遙かに款を送る勢あり、彼を捨て此を取る、亦理なしとせんや。此の戦の夕、一部將が我に三千の騎兵を與へよ、將軍の爲に直にローマを衝き、二日を出でずして將軍をローマの城中に晩食せしめん」と獻策せし時、彼既に其の得失を知る、必ずしも後人の非議を俟たざるなり。彼の國人は必要大切の場合にも、曾て十分の援兵を彼に送りしことなく、十分の金穀を彼に與へしことなし。是彼が十六年間敵國を蹂躪しながら、遂に其の成功を最後に誤りし大原因なり。

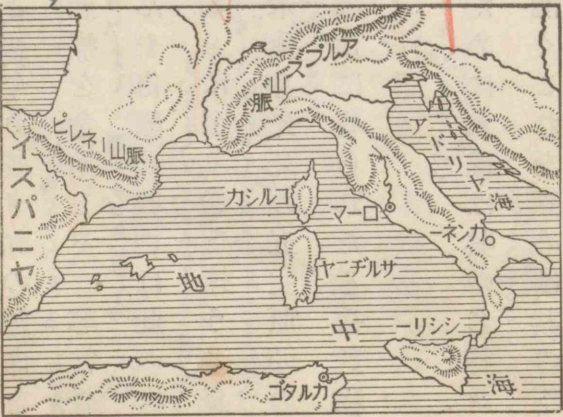
實に本國人民の罪にして彼の罪にあらず。かくの如くにして、彼は十六年間自ら兵を他國に募りて其の缺を補へるのみならず、其の金穀も常に之を敵國に取れり。其の忍耐の大なる、亦其の智略と並行すと謂ふべし。

彼は善く戦へり。彼は巧に外交を操縦せり。然れども其の本國は却つて敵の侵入を防ぎ得ず、勢の救ふべからざるに及んで彼を召喚して之に當らしむ。嗚呼、亦遅し。彼の智勇も之を如何ともする能はず。しかも猶此の存亡の秋に在つて敵と講和の約を結び、國人をして小康を得しめ、一方には財政を釐革し、一方には憲法を修正し、下層人民の愛國心を涵養し、國帑の急を緩め、莫大なる償金を年々支辨し得る途を畫策せり。彼豈尋常の一武弁ならんや。彼をして平時に出でしめば、必ずや治平の良

Hasdrubal
(一前203)
將
カルタゴの勇
ハスドルバル

宰相たらん。

其の未だ本國に召喚せられずしてローマの野に轉戦するや、兵寡く食竭く、恢復の望は單に懸りて其の實弟ハスドルバルがイスパニヤより援軍を率ゐて來り合するにありしなり。然るに天は衰邦に祚せず、彼の弟はイタリヤの北野に破られ、彼が手を握りて久別の喜を叙せんと樂しみし其の人の首級は、敵の槍鋒に貫かれて、はるかに彼が營前に現れたり。嗚呼、人生悲惨のこと多しといへども、未だ此の人の此の時の如きはあらざるな



近附海

出師未捷

唐の詩人杜甫が諸葛亮を詠じた詩句

五丈原

諸葛亮の本營のあった處

陝西省鳳翔縣にある

武侯

諸葛亮 蜀漢の忠臣

餘杭

今の浙江省杭州府

岳武穆

岳飛 宋の忠臣

り。

彼が遙かに弟の首級を望みけると、我今カルタゴの運命を知

れり。と歎ぜし一言は、如何に無限の悲痛を含みしぞ。尋常骨肉

の情よりするもなほ忍ぶ能はず、況んや自國の興亡は此の援軍

の勝敗に懸れるをや。史を讀み、こゝに至り、卷を掩うて長歎

せざる者果して幾人かある。出師未捷身先死の五丈原頭の武

侯や、盡忠報國の黥文を露して餘杭の市に斬られたる岳武穆も、

亦何ぞ比するに足らん。

彼の戰略戰術が人目を眩耀するがために、人或は其の名將たる

を知つて其の人格を察せず。若し能くこれを究めば、其の不幸

を悲しむ情轉深きを加へん。千古傷心の事實に此の人の一生

の如きはあらざるなり。(戰時畫報)

永井潜

生理學者
東京帝國大學教授
醫學博士
明治九年廣島縣生

一七 競技の精神

永井 潜

競技には、權勢もなく、門閥もなく、情實もなく、財力もない、全く裸一貫の身體と身體がぶつつかつて、眞劍に、誠實に、無邪氣に、火花を散らして戦ふのである。さうして眞に強い者が勝ち、眞に弱い者が負けるのである。これくらゐ如實に、端的に、徹底的に、眞を發露するものは外にない。随つて競技が眞理を愛する者、誠の道に従ふ者に取つて無上の喜であることは、申すまでもない。かくて眞を冀ふ希臘人をしてスポーツの國民たらしめたのである。また希臘の文化には、デモクラテック、スピリットが、何處までもその基調を成してゐる。この意味に於て、最もデモクラテックな精神を啓發する者として、競技が喜ばれたのである。

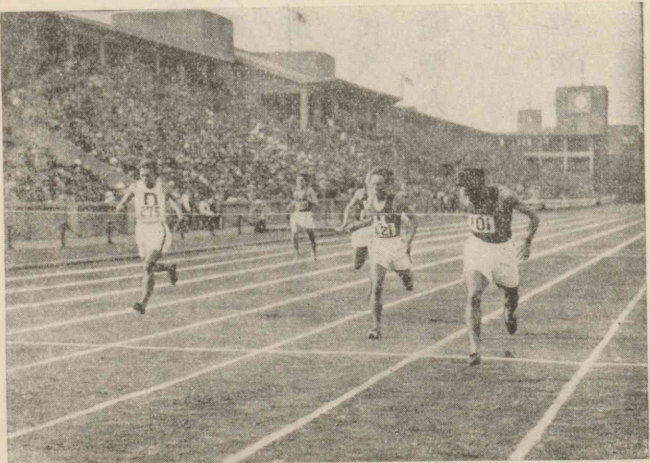
スポーツ
競技
Sport
デモクラテック、スピリット
Democratic spirit
平民的精神

思ふに、競技には年齢の相違もなく、身分の高下もなく、職業の差別もなく、見る者も、見らるゝ者も、悉く皆、同一の時、同一の場所で、同一の嗜好の下に打寄つて、我も人も、平等一如、悉く皆清い、美しい趣味のために融けあつてしまふのである。その意味に於て、希臘人は甚だ競技を好んだのである。そして又、これを好愛すると共に、善を求むる人間の本性に對して、競技は一道の力強い光明を與へるものといはなければならぬ。何となれば、競技を行ふに際して、人間本然の徳性、即ち善の性質が迸り出づべき多くの機會が恵まれるからである。

雪を凌ぎ霜に耐へて、凜として咲出づる梅の花にも、優にやさしい香があるやうに、血涌き、肉躍り、龍拏虎擲、火花を散らして闘ひつゝある間にも、自ら競技道徳の發露がある、その間に滾々たる

友愛の情が涌き、懐かしい謙讓の徳が流れ出る。

満場鬨として聲なく、固唾を呑み息を凝らして控へてゐる幾千の應援者幾萬の觀客の前に、凜々しく立並ぶ選手を見ては、戦はざるに早く既に涙ぐましい氣分が涌く。應援者が選手の心を汲み、選手が應援者の心に感激する時、勝つも涙、負けるも涙、この清い温かい涙の中に、一切の世間的、功利的の利害得喪を超越した、純眞無垢の情緒が流露する。そしてこの清い温



神宮競技場

かい涙の中に、純真無垢の情緒の中に、我も人も思ふさま浸ることが出来るのである。かゝる清い享樂、純な氣分は、今の時、競技を措いて他に何物を以て代へることが出来るであらうか。文化が進むと共に、生存競争が愈々烈しくなり、うき世の中が益々辛くなつて来る今の時に於て、暫時なりとも、かういふ齷齪たる世の塵から脱れ出て、この綺麗な、無垢な境地に心を遊ばすことが、どれだけ、善を冀ふ人間の本性に、大いなる慰安と光明とを與へるであらうか。善を希求する希臘人が、いたく競技を喜んだのは當然のことであつたのである。

競技によつては、なほ幾多の徳性が涵養されるのである。個人と個人と對立して技を争ふ時、眞に電光石火、寸分の隙も許されないのである。かくの如くして勇氣果斷克己、忍耐敏捷、自信努

フエロー、フィリング
 Fellow-feeling
 同情
 思ひやり

勾當
 盲人の官
 檢校の下
 座頭の上

力等、人間が人間として世に處し事に當る上に最も大切な幾多の徳性の養成せらるべき機會が、競技によつて恵まれるのである。更に又團體競技を行ふに當つては、協心節度責任義務服従といふやうな、人間が社會生活をなし、相互扶助を行ふ上に於て、缺くべからざる幾多の麗しい徳性が培はれるのである。かくの如くして、競技によつてフエロー、フィリングを高潮すべき機會が與へられる。そしてこのことが、一國家として、一民族として、其の隆昌進運を來す上に、どれだけ大切であるかは、今更言ふを俟たないのである。(人及び人の力)

一八 どぶかつちり

勾「罷り出でたるはこの邊に住居仕る勾當の坊でござる。さや

嵯峨
京都の西郊
今の京都市右京區嵯
峨町

うにござれば、今日は菊一をつれ嵯峨へ参らうと存ずる。菊一、あるか。

菊「これに居りまする。」

勾「其の方を呼出すは別のこともない。嵯峨へ参らうと事ぢやが、参りやらぬか。」

菊「勾當様の参らさしやれまするなら、参りませう。」

勾「おぢやれ〜。」

菊「行きまする。」

勾「なう、菊一。」

菊「何でござりまする。」

勾「竹筒さを持つたらようおぢやらうものを。」

菊「これに心得て持ちました。」

勾「ふん、好う氣が付いた。おぢやれ〜。」

菊「参りまする。」

勾「なう、菊一、彼のとなとといふは川ではないか。」

菊「あ、これは紙屋川かといひまする。」

勾「いかう水が出たさうなぞや。」

菊「待たしやれませい、瀬踏せをして見ませう。石は無いかぢやませい。いえ、あるは。ま、此處へ打つて見ませう。どぶ〜。」

あ、いかう深さうな。上手へ打つて見ませう。や、えい。どぶり、かつちり。はあ勾當様、上へ廻らしやれませい。上が浅うござりまするぞ。」

勾「やい、菊一。負うて、渡せ。」

菊「こな様も渡らしやれませい、さて。」

紙屋川
京都上京區北野のあたりを南へ流れて桂川へ入る小川



りました。

道「罷り出でたるは道通みちとほりでござる。いや座頭が座頭を負うて渡すと見えた。某が負はれて渡りませうぞ。」

ど 勾「やい、菊一、おのれをつれるはこの
ぶ狂 やうな川なども負はれて渡らう
か と思つてつれる。急いで負へい
つ の。
ち記 菊「こゝへござりませい。あゝ、いか
り う深うござりまするぞ。やうや
うの事して渡つたよ。
道「やれさて、まんく」と負はれて渡

勾「やい、菊一、おのればかり渡つて、なぜに某をば置いて行たぞいやい。」

菊「わ、勾當様、又今のほど負ひこしたに、足のまめな。なぜに又そちらへ行かしやつたぞ。はれさて物好きな、目の見えぬ者をば、あちらへこちらへさするが面白いかぢやまでい。さ負はれさつしやれい。いえさて、又負はれさつしやれ、面白ござるの。」

勾「何をいふぞいやい。」

菊「何いふと事があるものでござるかいの。は、深い處へはいりましたはいの。」

勾「これおどれ、何事仕居つたぞ。」

菊「轉びましたはいの。」

勾「やれさて、くつと濡らし居つた。」

菊「はじめのど置かつしやりやよいこと、二度三度さつしやる處で、え、濡れて寒やな。」

勾「やい菊一、今の竹筒は流れはせなんだか。」

菊「腰にゆはへつけて置きました。」

勾「どれや一つ飲まうに。」

菊「わしもたんませう。参りませい。」

道「いや座頭が酒を飲む體でござる。負はれた上に又も飲みませう。」

菊「勾當様、参りませう。ちやうとござりまする。わしも一つたべませうよ。」

勾「やい其處な奴、おれにもくれいで、なぜに飲むぞい。」

こしめして
「きこしめで」の略か

菊「今のほど、こしめしてから、飲みかくしばかりさつしやる。」

勾「飲まうことはい。」

菊「いや、これ、参りませいの。ござりまするか。又私もたべませうよ。」

勾「やい菊一、おればかり飲むか。なぜにおれにはくれぬぞい。」

菊「これもござらぬは、樽かぶらしやれい。」

道「さてもく、座頭といふものは面白い者でござる。ちといさかはしませう。」

勾「やい、此處な菊一めは、酒くれぬのみならず、おのれはなぜにくはせたぞ。」

菊「勾當様、飲みかくしさつしやるさへちやに、何とさつしやる。勾「いや。おのれ憎い奴の。」

菊「これやなんとめさるぞい。」

道「さてもくよい慰でござる。どづいていさかはする、こんな面白いことはござらぬ。」

菊「なう、勾當様、今のを聞かしやつたか。」

菊「さればいやい、今思ひつけた。」

菊「酒飲うだり、くはしたり、負はれたも彼奴でござりませう。」

勾「菊一、捕まへ。」

菊「勾當様ござりませい。おのゝ何處に居るぞ。」

勾「やるまいぞく。」

道「わく。」

(狂言記)

一九「大倉鶴彦翁序」

徳富蘇峯

大倉鶴彦
實業家
名は喜八郎
越後の人
男爵
昭和三年薨
年九十二
徳富蘇峯
新聞記者
貴族院議員
帝國學士院會員
名は猪一郎
文久三年(五三)肥後
國水俣生

岩崎君東山
實業家
富豪
名は彌太郎
土佐國生
明治十八年歿
年五十一
澁澤君青淵
實業家
名は榮一
子爵
武藏國生
昭和七年薨
年九十一

維新の風雲は、政治、軍務、學問、藝術、其の他社會の各方面に卓犖の人物を輩出せしめたり。乃ち實業界に於ても、岩崎君東山の如き、澁澤君青淵の如き、其の人尠しとせず。我が大倉君鶴彦の如き、亦實に其の中の錚々たる一人となす。

米壽翁鶴彦君の生涯は、一篇の人生奮闘史にして、亦成功史なり。君や北越に生れ、家世々地方の豪族たり。しかも不羈自恃の氣象は、易に居り逸に安んずるを屑とせず。青春十八歳、自ら運命を開拓すべく、決然志を立て、江都に出でたり。爾來七十年、事概ね志の如く、功或は之に超ゆ。しかも其の意氣精神、依然たる當時の十八青年たり。

君や膽略あり。維新當初、腥風血雨に滿てる際、夷然として死生の巷を出入して、毫も顧慮する所なかりき。偶、九死一生の極所

桑榆
日没
轉じて西方
「之ヲ東隅ニ失シテ、
之ヲ桑榆ニ收ム。」
(後漢書)

に陥りたりしも、たゞ傍若無人の氣膽と縱横無礙の機略とを以て、之を脱するを得たり。他人極所に於て、退一步法を用ふ。君は却つて進一層法を用ふ。而して其の進一層法を用ふるや、桑榆日薄れる八十翁の今日に於て、最も然りとす。是、君が老いて愈、壯なる所以。鶴彦君の本領此に於て之を見る。凡そ戊辰の役を首として、最近の世界大戦役に至る迄、國家戎事ある毎に、其の軍需品の調達、輜重糧餉の供給、運輸等、一として君の關係せざるものあらず。しかも君の國家に貢獻したる、豈ただ戎事のみといはんや。通商貿易、殖産興業、苟も國家を富強ならしめ、民生を博厚ならしむるもの、君の力に俟つ所、洵に鮮少なからざりしなり。是、君が純然たる一個の實業家として當世に名譽ある勳章と位階とを贏ち得、遂に男爵に叙せらるゝの光榮を

忝うしたる所以なり。

君や能く財を生ずるのみならず、亦能く財を用ふ。天下財を生ずるの道に巧にして、財を用ふるを知らざるものあり。財を用ふるの道を解して、財を生ずるに拙なるものあり。たゞ君や、能く積み能く散ず。天下富を以て雄なるもの何ぞ限りあらん。しかも君が如く社會公共の爲にその富を善用したるもの、それ幾人ぞ。君は實に大倉集古館の創立者にして、寄附者たり。君は實に東京に、大阪に、朝鮮に三個の商業學校の設立者たり。恩賜財團濟生會の成立せんとするや、君は實に率先して翼贊者の魁となれり。其の他神戸に於ける大倉山公園の如き、郷里に於ける各種の事業の如き、固より十指を屈するに遑あらず。しかも君は、決して富を衒うて自ら快とするの鄙夫にあらず。

大久保甲東
名は利通

其の節すべきに於ては、一錢一厘の微も決して忽にせず。しかも其の揮ふべきに於ては、百萬以て足れりとなさず。曩に大久保甲東君がために「哲人知機」の四字を書して、之を與へたり。惟ふに甲東は豫め君の一生の事歴を洞見したるがためか、非か。

伊藤公

公爵伊藤博文

伊藤公は財利の念最も淡泊なる經世家なりき。しかも恆に君を親近したり。若し實業方面に於て公の親交者を求めば、必ず君を以て其の唯一とせざるも、第一とせざるを得ざるべし。山縣公は自ら一介の武弁を以て居れり。しかも亦善く君を遇したりき。石黒況翁は古勤王家の精神を明治・大正の時代に把持したる志士なり。しかも恆に君と相好きもの、必ずしも單に郷友たる所以のみにあらず。古人曰く、其の交る所を以て其の人を見るべし」と。予は君が所謂實業方面以外の交友に就いてト

山縣公

公爵山縣有朋

石黒況翁

子爵石黒忠憲
況翁はその號

桂公

公爵桂太郎

するに、君の皇室中心主義と、君の一意國家に奉仕するの誠意とを識認せざらんとするも能はざるなり。

桂公會て予に語りて曰く、世に完人無し。しかも若し今北海道の大原野に百萬石の城下を經營せんに、鶴彦君以上の適材を得る、殆ど不可能なり」と。桂公亦完人にあらず、しかも人を觀るの明識に於ては、公も亦一隻眼を具へたりき。苟も君の事歴を知る者は必ず公の此の言に裏書するを辭せざるべし。

君は少小より尋常一様の商賈にあらず。夙に眼を世界の大勢に注ぎ、恆に世運の開拓を以て自ら任じたり。而して中年以降、世界列國角逐の局面の漸次東洋に推移するを見、自ら之に善處するを怠らず。而して其の晩年は殆ど其の心身を日支提携に傾注したり。されば君の交友は清國の往時より民國の今日に

山陽頼氏

名は襄

山陽はその號

安藝の人

天保三年(西九)卒

年五十九

馬文淵

伏波將軍馬援

後漢の勇將

文淵はその字

武陵の五溪蠻が叛い

た時八十餘歳の老軀

を捉げて出征を乞ひ

鞍に據つて顧眄し以

て用ふべきを示した

といふ

至るまで支那全土に普く、而して君の事業も亦滿蒙より禹域の
各方隅に及べり。而して君慨然として曰く、八十八歳以降は内
地の業務を後繼者に一任し、専ら身を以て之に當らん。と。昔は
山陽頼氏君の祖父定七翁の墓に銘し、翁を以て馬文淵に擬せり。
しかも予を以て之を見れば、寧ろ君を以て馬文淵に擬するの一
層適切なるを覺えずんばあらず。所謂鞍に據りて顧眄し、以て
用ふべきを示したる老伏波の意氣は、尤も君に於て之を見る。
君は學者を以て自ら居らず。しかも能く學を好み、能く藝に游
ぶ。其の趣味最も博く、美術、音樂、百般の技藝皆賞識せざるなし。
時に狂歌を詠じて懷を暢ぶ。而して其の筆翰の如きは殆ど堂
に入る。
予は江湖の一老書生、固より實業界に於ける無縁の衆生のみ。

しかも君と相知る四十年。聊か其の半面を詳かにするを得た
り。蓋し君が尊皇愛國の精神に於て默會する所あればなり。
頃日君の門下鶴友會の諸氏、君の傳記を編し、君が米壽の祝意を
表せんとするや、君、予に囑するに、其の卷頭に題せんことを以て
す。予不敏を謝す。しかも君彊ひて容さず。故に聊か其の平
生見聞する所の一斑を掲げて之に應ず。惟ふに君は其の福壽
兩つながら祖父定七翁に超え、其の事功は乃ち之に倍蓰す。君
は能く其の祖先を顯す者に庶幾し。たゞ予の不文山陽頼氏の
十分の一に値せざるを憾とす。しかも君の一代の行實、其の綱
目掲げて本書に在り。讀者子細に之を見れば、必ず予が言に於て
豁然貫通する所あらん。(人さまさま)

阿部次郎

哲學者
東北帝國大學教授
明治十六年山形縣生

二〇 雜草

阿部次郎

リズム
Rhythm

去年の秋植ゑたばかりでまだ疎な芝草の間に、猛烈な勢で雜草が蔓り出した。まだたけの低いうちは、同じ緑の色にまじつてそんなには眼に立たなかつたが、たけの延びるに従つて、それが眼ざはりになりだして來た。それで私は毎朝まだ涼しいうちに、朝飯前の運動として草取をすることを思ひついた。此の頃になれば、宵の口からしつとりとおりの露が朝になつて益、繁く置いてゐるのを、跣足の足うらで踏む冷たさがいゝ心持である。三四十坪ある芝地の片端からそろ／＼と草をとつて行きながら、考へかけてゐることを考へ進めて行くとき、其處には、机の前に坐つてゐるときとは又別様のリズムが生れる。固より私の草取は遊戯の一種に過ぎないが、この遊戯は、私に、筋肉労働は――

トルストイ

Tolstoi
(1823-1910)

小説家
ロシアの思想



トルストイ

――特に土を對手にする筋肉労働は、一種特別の労働であることを感じさせる。筋肉労働だけが労働でないことは言ふまでもない。併しそれは頭の労働とは違つた一種の労働である。さうしてトルストイなどが考へたやうに、それはあらゆる人にとつて必要な労働であつて、或程度までこの労働と接觸することを怠るとき、恐らくその人の生活全體に或

種類の報いを齎さずにはゐられないやうな性質のものである。土を相手にする筋肉労働には、これを無視する者の觸れ得ないやうな、健全な喜と苦しみとがあるであらう。單にこの一點か

ら考へても、土地と農業とを忘れた文化が本質的に人間を幸福にする力があるかどうかは疑はしい。——私はかういふやうな、身の程を忘れたことを考へながら、芝草の間にまじる雑草を抜捨てて行く。

芝草の間にまじつて最も勢力を逞しくしてゐるのは、葉が芝に似てもつと丈高く伸び、根の方に少し赤みを帯びた、何とかいふ草である。私は一種の憎しみを以て遠慮なしにこの贗者を抜捨ててしまふ。異臭を持つてゐるどくだみも亦私の愛惜を受けることが出来ない。併し鐵火箸のやうに諛ひ氣のない莖に、折から淡褐色の花ともいへぬやうな花をつけてゐるかやつり草になると、私の手は前ほど勇敢にこれをむしり取ることが出来ない。さうした愛惜の心をもつて芝の間にまじる雑草を眺

どくだみ



かやつり草



めはじめると、其處には何といふ多様なかはいらしい植物の種類が、この狭い空間にその生を營んでゐることであらう。圓い葉の柔かなものや、葵の葉のやうな形をして三四葉集つて一つの圓居をしてゐるものや、赤みを帯びた小さい莖を横に這はせながら芝草のすき間に謙遜な自分の領分を占めてゐるものや、見るに随つて新しい種類が目について來る間に、淡紫や黄色の小さいく、花さへ咲いてゐるではないか。私はこの小さいかはいゝものを抜捨てるに忍びなくなつて、彼の憎むべき贗者だけをあさつて、これを退治して行く。

併しこの贗者を根絶することだけでも容易ではない。大抵取盡くした積りで一兩日たつと、いつの間にか彼等は又芝より高くそのたけを挺んで、その存在を其處にも此處にも告知して

ある。眞晝の光がぎら／＼と照つてゐるうちは、凡ての葉が一樣にその光を照りかへしてゐるので、それがそんなにも目立たないが、朝の柔かな光が草葉に置く露を目立たせてくれるときには、露を宿して白銀色を帯びたその葉は、とても自分を隠すことが出来ない。かくて又私にはその朝の仕事が與へられるのである。(北郊雜記)

二 郷土の魅力

相馬御風

郷土といふものの人間の心を惹きつける作用は、今更ながら不思議なものである。一方に、

「月日は百代の過客にして、往きかふ年も亦旅人なり。船の上生涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅にし

相馬御風
文學者
名は昌治
明治十六年新潟縣糸魚川町生

月日は百代の過客
夫レ天地ハ萬物ノ逆旅ニシテ、光陰ハ百代ノ過客ナリ。
(唐の李白)

て旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいつれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思止まず。といひ、或は、



「羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん。これ天の命なり。」
松 身無常の觀念、道路に死なん。これ天の命なり。
尾 松 身無常の觀念、道路に死なん。これ天の命なり。
芭 蕉 などといつてゐた彼の芭蕉でさへ、他方に

於ては、

「代々の賢き人々も故郷は忘れ難きものにおもほえ侍るよし。我今は初の老も四年過ぎて、何事につけても昔の懐かしきま

芭蕉
俳人
松尾桃青
伊賀國上野生
元祿七年(二三四)寂
年五十一
初の老
四十歳

伊陽
伊賀

まに、同胞のあまた齡傾きはべるも見捨てがたくて、初冬の空
 の打ちしぐる、頃より、雪を重ね霜を経て、師走の末伊陽の山
 中に至る。猶父母の
 いまそかりせばと慈
 愛の昔もかなしく、思
 ふ事のみあまたあり
 て、

故郷や臍の緒に泣
 く年の暮

などといつてゐる。

故郷は蠅まで人をさしにけり

故郷は西も東もばらの花



小林村
一松
茶甫
筆

一茶
俳人
小林彌太郎
信濃國柏原生
文政十年(一八二七)歿
年六十五

良寛
歌僧
越後國出雲崎生
天保二年(一八三一)歿
年七十四

といつた風に、永い間自分の故郷を呪つて、旅から旅へと漂泊し
 てゐたあの拗ねものの俳諧寺の一茶ですら、晩年には、
 これがまあつひのすみかか雪五尺
 などと驚きながらも其の雪深い信州柏原の郷里に歸り住んで、
 そこで一生を終へた。

更にかの近世稀有の歌僧と謂はれる越後の良寛和尚の如き、二
 十二歳から四十三歳までの二十餘年間の雲水行脚の旅にあき
 たらないうで、それ以來ずつと越後の郷里に孤獨な庵住生活を續
 けて、靜かな往生を遂げてゐる。

故郷へ行く人あらば言づてむけふ近江路をわれ越えに
 きと

草枕夜ごとに結ぶやどりにもむすぶはおなじふるさと

の夢

などといふ彼の旅中の歌を讀んでも、いかに彼が故郷を慕ふ思の切なるものであつたかを察することが出来る。

二十三歳で妻子を振棄てて佛門に歸し、諸國修行の旅に出た西行も、

柴の庵のしばし都へかへらじと思はむだにもあはれなるべし

世の中を捨てて捨て得ぬ心地して都離れぬ我が身なりけり

などと歌つて居り、且晩年には都に歸つて死んだ。

かういふ風に、昔から代表的な漂泊の人々として知られた此等脱俗の人々さへも、不思議に彼等の生れ且育てられた郷土に對

西行
歌僧
俗名佐藤義清
建久元年(八五〇)寂
年七十三

しては、しかく切なる愛慕の情を持つてゐた。そもく、此の郷土の、人間に對して持つてゐる魅力は、どこから來るのであらうか。

郷土が私たちの心を惹きつける點は、どういふところにあるか。その地の自然が、他の何れの土地よりも風景の美に於て優れてゐるためかといふに、必ずしもさうではない。人情が特に他の何れの土地のそれよりも醇美であるためかといふに、それも然りとは言へない場合が少くない。それでは何か特別に自分の生活に都合のいゝ、外的條件がある爲かといふに、それも必ずしもさうばかりとは言へない。さうかといつて、私たちは、理智的に考へて、故郷は大切なものだとは明白に判斷してから後に、故郷を慕つてゐるとは猶更考へられない。

然らば、人々は何故に自分の郷土といふものに心を惹かれるのか。それは全く、何とはなしにである。理智的判断によるのではなく、功利的見地からでもなく、或は特に美的判断が然らしめるといふでもなく、それはたゞ「何とはなしに」である。郷土の人心を惹きつける魅力は、實に此の何とも言ひあらはされない所から發する。それは自然と人間と、過去と現在とを一つに融かした一種不可思議な、音樂的な、詩的な魅力である。又私たちが郷土を慕ふ心は、全く自分にもよくわからない内心自發の情緒である。此の不可思議な情緒の存在してゐる事實は、恐らく如何なる理智の人と雖も否定することは出来ないであらう。けれども、今の時代には追々此の自分の郷土といふものを失ひつゝ、ある人が多くなりつゝ、あることも、亦明白な事實である。

Emerson
(1803-1882)
思想家
詩人
アメリカの思
エマーソン

私は常に、漁夫に取つて、海は單に彼等に生計の資を與へる爲のみの場所ではなくして、又實に彼等に取つての貴い心の糧を與へる領土であると思つてゐる。全く漁夫ほど海を愛することの切なものはない。海は實に彼等に取つては離れがたい心の世界である。それは、農夫に取つて山野・田畑が單に彼等の生計の資を得る場所でないと同じである。外に愛慕すべき郷土を失ふことは、同時に内に心靈の故郷を失ふことである。漁夫に取つて海は單に生計の資を得るのみの場所と考へられる時、漁夫は即ち心の故郷を失ふのである。農夫が山野・田畑を生活の爲の資を得る場所とのみ考へる時、農夫は心靈の郷土を失ふのである。よく引合ひに出す言葉であるが、私にはどうもエマーソンの自

然論の中の左の一節が忘れがたい。

「樵夫の伐る一箇の材木と詩人の見る樹木との間に區別を生ずる。私が今朝見た愛すべき風景は疑もなく二十三十



エマソン

ほどの農圃から成立つてゐる。甲は此の畑を所有し、乙は彼の畑を所有し、また丙は向ふの森林地を所有してゐる。しかし彼等の中誰一人も此の風景を所有するものはないのである。蓋し地平線の上には、あらゆる部分を全きものに統べて観ることの出来る眼をもつた者の外には何人も所有せぬ一つの財産がある。即ちかくの如

き人は詩人である。此の財産こそ此等三人の農圃に於て最も優れたものであるが、彼等の所有證書は、此の財産に對しては何等の権利をも與へぬのである。

此のエマソンの所謂二つの心を合はせ持つた人々が最も幸福な農夫であり、樵夫であり、漁夫であると私は思ふ。樹を材木として伐る樵夫は、同時に樹木を全き一つの物として眺め得る詩人であるのに何の差支があらう。海を漁りの場所とすると同時に、其處を心の郷土として愛することの出来る漁夫が、最も幸福な漁夫であるべきである。

郷土に定住してさういふ幸福を見出し得る人は、眞に郷土を有する人だともいへる。私たちには、さういふ人々の生活が最も懐かしく思はれる。

長い間アメリカへ往つてゐた一人の藝術家が、久しぶりに故國の自然や人間の生活を、彼の新鮮な眼で眺め直した印象記を書いた中に、日本の農民の生活について書いた次の如き一節があつた。

「彼等とはどんな仕事の中にも、きつと楽しみを見つけ出す。さうして其處へ彼等の藝術を加味する。日本の百姓がその農圃を藝術的に耕すことは、本當に君の國の園丁が花園を作るほどに繊細な美的注意を拂つてゐる。あのヒロシゲの繪で有名になつた東海道を汽車に乗つて旅をして見ると、兩側の田圃は、みんなかはいらしい庭園だ。そこには此の國の百姓が仕事を楽しんだ跡が鮮かに残つてゐる。君の國の勞働者が仕事を苦痛だと思つて、早く晝間の八時間が過ぎて自由な

彼等
日本人

君の國

アメリカ

ヒロシゲ

安藤廣重

江戸後期の浮世繪師

安政五年(五八)歿

年六十二



東海道の平塚
安藤廣重筆

る夕暮の來るのを待つてゐるあの心持に比べると、日本人はまことに幸福な生活をしてゐると謂はなければならぬ。

日本の百姓だとして皆が皆さうだとも謂へまいけれども、併しさういふ詩人の心を持つた人々のなほ多くあることは、否むことの出来ない事實である。私たちは此の貴い事實を祝福せずにはゐら

れない。

西洋のある哲學者の書いたものの中にも、こんな一節があつた。
 「ロシヤとの戦争中、粗末な米の飯を有難がつてゐた日本の兵士は、何かの機會に僅かばかりの草花でも見ると、ヨーロッパの遠足家のそれにもまして一種の精神的更新を感得したといふことである。一體ヨーロッパの遠足家といふものは、無慈悲にも自然の最も美しい春の着物である草花を汚したり、さまざまの樹木や記念物を傷つけたり、卓子や椅子などにまで容赦なく自分のつまらない名前などを彫りつけたりして、彼等自身を楽しませてゐる輩である。」

私たちは、一般のヨーロッパ人が、それほど自然を愛し得ない人たちであるかどうか、事實を知らない。しかし、私たち日本人が一般に自然を愛する切なる心を持つた民族である事實は信じ

て疑はない。自然は何といつても私たちの心の故郷である。脚氣患者が郷里に歸ることによつて何時となしに健康を恢復することが出来るやうに、私たちの傷ついた心は、魂は、心の底から自然を愛し、自然に懐かしむことによつて、その健康を取戻すことが出来る。

自然を魂の郷土として懐かしむことの出来る幸福を、私たちは永遠に失ひたくない。私たちは自分にも、また自分の子供たちにも、永遠に郷土の有する魅力を失はせたくない。郷土は私たちの爲の搖籃であつて、また墳墓であるべきである。(對山雜記)

三上參次

三上參次

試に隣邦支那の近狀を視よ、既に十數年間に互りて内亂の慘禍

三上參次
 國史家
 宮内省御用掛
 臨時帝室編修官長
 東京帝國大學名譽教授
 文學博士
 慶應元年(二五五)播磨國生

を續け、國民生を聊せず、延いて累を他國民にも及し、實に同情に堪へざる情態にあり。此の際何人か之を平定し、四百餘州の民を安んずるものあらば、これ確に英雄とも偉人とも恩人とも稱せらるべきものなり。我が國に於ても、嘗て應仁の亂このかた、群雄四方に割據し、所謂戰國時代といはるゝものありたり。勿論支那の今日とは事情を異にせる點少からずと雖も、要するに戰亂の時代たりしは彼此相似たり。かゝる情態の百餘年繼續したりし末に、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三傑相次いで出て、遂に亂世を平定して、上皇室を安んじ奉り、下は萬民を塗炭の苦より救ひ出せり。これ洵に均しく國家の恩人といふべきものなり。そのいづれも、別格官幣社として奉祀せられ、上下の尊崇を受くること宜なりといふべし。然るに、信長は僅かに一代、し

別格官幣社

建勳神社
京都市上京區紫野
北舟岡町
豊國神社
京都市東山區大和
大路正面茶屋町
東照宮
栃木縣上都賀郡日光町

かも中道にして臣下に叛かれて斃れ、秀吉は一代を保ち得たりしも、其の子秀頼に至りて忽ち滅び、家康は即ち十五代二百五十年に傳ふることを得、しかもその後裔今に榮ゆるを見る。三人者の禍福の差異餘りに甚だしきものあり。これ、時代の趨勢、周圍の事情に由るところ多しといへども、三人者の性格に由るところまた少からざるを見る。

古來三人者を比較して、種々の譬喩をなせるもの多し。其の勞逸の度を推測して、之を餅搗に喩へ、杵を振上ぐるものを描きて信長とし、次に、餅を扱ふものを描きて秀吉とし、最後に、坐して餅を圍め、且食ふものを描きて之を家康とせる繪圖あり。信長は荒蕪の地を開墾せるものなれば、餅搗とせるも當れり。秀吉は開墾を繼續し、之に種子を播きたるものなれば、餅扱とするも亦

當らずとせず。されども家康もなか／＼苦勞したるに拘らず、只坐して餅を圍め且食ふのみとするは、蓋し餘りに家康を輕んじたるものといふべし。されば、この繪は、江戸時代に於て、早く其の板行を禁止せられしなり。次に三人を杜鵑に喩へての發句に作り、啼かざれば殺してしまへ時鳥の句を信長として、其の短慮果敢なるを示し、次に啼かざれば啼かして見せう時鳥を秀吉として、其の豪邁不敵なるを示し、最後に啼かざれば啼くまで待たう時鳥を家康として、其の忍耐持重を示せるものあり。これは可なり能く三人者の性格を表現せるものなりと思はる。關ヶ原の戰の前に、家康の伏見に在りし時、石田三成側の細作刺客の虞多きに當り、家康の臣下は家康に勸むるに、速に關東に下るべきを以てす。然るに、家康は平然として伏見に留れり。前

前田德善院

名は正勝
 玄はその法名
 信長秀吉家康に仕へ
 た
 慶長七年(三六)卒
 年六十四
 安土城
 今の滋賀縣蒲生郡安
 土村

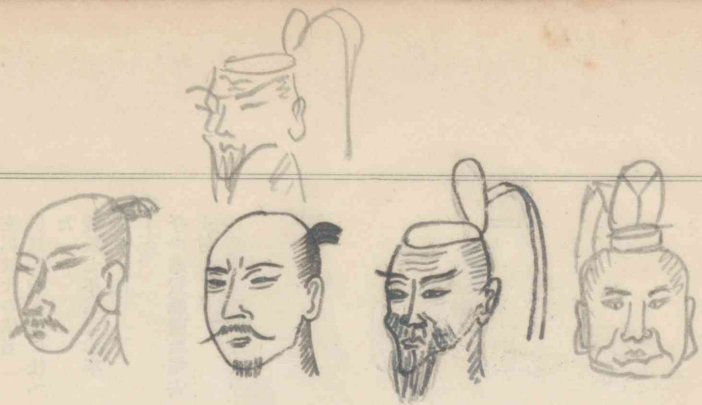


田德善院玄以之を評して、此の場合、若しこれが信長ならんには、直に安土城に引揚ぐるならん。若しまた秀吉ならんには、直に



前田德善院
 肖像
 資料
 善集

討つて出づるならん。然るに、家康は泰然として客と碁を圍み、少しも平生と異なる容子なし、分らぬ人なり」と評したりといふ。これも相當によく三人者の性格を説明せるものといふべし。予は嘗て述べし事あり、之を動物に喩ふれば、信長は萩咲く野邊の猪の如く、臥す猪の床なども聯想せられて優しきと同時に猛烈當るべからざるものあり。秀



吉は空を行く天馬の如く、又銀鞍を置ける馬の櫻樹に繋がれたるが如く、華やかにして心行くものあり、とにかく馬に比すべし。家康は即ち重荷を負へる牛の、春の野邊を行くが如く、沈着にして間違なし。又之を花に喩ふれば、信長は薔薇の如く、美麗なれども、接觸するには注意を要す。又寒牡丹の意外に雪に折れしにも譬ふべく、中道にして斃れ、撥亂の功を全うせざりしを惜しむべし。秀吉は即ち櫻花なり、どこまでも華やかにして、名を海外にも馳せ、壯觀を極めたり。家康に至りては、即ち梅花なり、能く寒に堪へて、花の盛も久しく、凋落しても尙實を遺す、是家康の飽くまで忍耐力強く、堅實なるに比すべし。これより進みて、三人者の性格を具體的に説明せんとす。

三人者とも、かく天才的人物なれども、尙幼時よりの艱難辛苦、即ち自然の修養によりて大成せられしものなるを感ぜざるを得ず。生來と修養と、二者孰れか人物を作ること多きとの問題に



織田信長 三河國長興寺藏

就いては、一概には言ひ得ざれども、非凡の天才者は暫くこれを措き、その他の場合には、自然の修養と勉強しての修養とによりて大成せるもの多きに居ることは、歴史家の立場としてこれを認めざ

るを得ず。今先づ自然の修養より觀察せんに、秀吉は、素生も判然とせざるほどの微賤なる身分を以て、田舎侍の草履取より身を起し、やゝ氣むづかしき信長に仕へて、遂に位人臣を極むるに

ハンデ、カップ
 劣者と平均を保
 たせるため優者
 に附する餘分の
 負擔
 Handi-cap
 今川氏
 今川義元
 齋藤氏
 齋藤龍興
 淺井
 淺井長政
 朝倉
 朝倉義景
 毛利
 毛利元就
 水野氏
 傳通夫人おだいの方
 徳川廣忠の室
 慶長七年(三三)薨
 年七十五

至りしに就いては、其の忍耐辛苦の如何に大なりしかは、想察するに難からず。織田氏は尾張の名族、三管領の一なる斯波氏の守護代の家なり。父信秀に至りて、武略英材尊王の事蹟を以て大いに著る。信長は其の子として、相當のハンデ、カップを有すれども、東には今川氏あり、西には齋藤氏ありて、頗る氣を揉ませられ、其の後足利義昭の來り投ずるあり、正親町天皇の密勅を下し給ふありて、頗る便宜を得たれども、尙淺井朝倉毛利の諸氏、比叡山・本願寺等多くの敵ありて、其の死に至るまで、遂に安心逸樂の境を得ざりしが如し。家康に至りては、殊に忍耐の結晶體、辛苦の權化なるかの觀あり。徳川氏は七代の以前より三河の小大名なりしも、今川・織田兩氏の間、介在して、その立場は頗る困難なりき。而して家康は、父廣忠十七歳、母水野氏十五歳の時の

岡崎
 今の愛知縣三河國岡
 崎市
 駿府
 今の靜岡縣駿河國靜
 岡市
 桶狭間
 愛知縣尾張國知多郡
 有松村の大字
 本能寺
 日蓮宗の名刹
 信長の光秀に弑せら
 れた當時は京都の六
 角南油小路にあつた
 今は寺町通押小路南
 にある
 達磨
 天竺の高僧
 支那に渡り禪宗
 の始祖となる
 Bodhidharma
 面壁九年
 達磨が梁の武帝に謁
 して悟の未だ開けぬ
 を感じ少林寺に入り
 山の崖に面して九年
 の間坐禪を續けたこ
 と

子と生れ、三歳にして母に生別し、八歳の時父に死別し、早く孤となる。其の前二年即ち六歳の時、人質として今川氏に遣はさるるに當り、途中に奪はれて織田氏の許に押送せらる。八歳にして一先づ岡崎に歸るを得たれども、直に豫定の如く今川氏に送られ、こゝに駿府に於て十二年を過し、十九歳の時今川義元桶狭間に敗死するに及び、始めて岡崎に歸ることを得たり。それより二十一年の間は信長に屈服し、信長本能寺に薨ぜしより後は、十三年の間勉強して秀吉に屈服したり。かくの如く、相次いで今川・織田・豊臣の三氏に屈服せること約五十年に近し。石の上にも三年といひ、達磨の「面壁九年」といふよりも、一段意義深きものあるを見る。その間、信長の時代には、そのために背面防禦の不利益なる任務を帯びて武田氏及び今川氏に當れり。後年家

小牧の戦

天正十二年織田信雄を授ける徳川家康と羽柴秀吉との戦
小牧山は愛知縣東春日井郡小牧町の西に峙つ山
名古屋の西北十軒

長久手の戦

天正十二年羽柴秀吉の部將森長可と徳川勢との間に起つた戦
長久手は愛知縣瀬戸市の西南にある一村落

長曾我部元親

土佐長濱の城主

根來

紀伊國那賀郡根來寺

雜賀

紀伊國海草郡雜賀地方にゐた本願寺門徒

桃山時代

豊臣秀吉が伏見桃山城で天下を治めてゐた時代

康は「武田信玄と石田三成とは、予の二恩人なり」といへりとの説あり。蓋し石田ありて關ヶ原の戦の起りしは言を要せず。信玄には、此の背面防禦を承れる間に、散々に揉みぬかれて、其の武略を養成せられたるを謂ふなり。又この半世紀の忍耐も、猫の前の鼠の如く、又蛇の前の蛙の如く、手も足も出ず畏縮し麻痺しての忍耐ならば、何人にも出来もせんが、家康は、或場合に於ては、擡頭し得ざるにあらざりしに、尙且其の英武を裏んで忍耐し、大器晩成を待ちたりしは全く驚くの外なし。かの小牧、長久手の戦後の如き、四國には長曾我部元親あり、紀伊には根來雜賀の僧兵あり、大阪には本願寺あり、是等の徒は、皆秀吉の虚に乗じて大阪を窺はんとす。此の場合に、家康若し之と相應じて乾坤一擲を試みしならば、或は早く成功して、國史の上に秀吉の桃山時代

を現出せざりしやも知れざるなり。但し、その代りに、若し失敗せば、史上に江戸時代を見る能はざりしやも知れざるは勿論なり。とにかく、家康は忍耐力の結



豊臣秀吉
高野山蓮華院藏

晶體なり。而して忍耐力の強きは同時に節制力あるを意味し、喜^レ怒哀樂に任せて輕舉妄動せず、沈^レ着^レ縝密に事を處理するを意味す。同じく苦勞人なりといへども、この點に於ては、家康は信長及び秀吉よりも一頭地を抜くものもの如し。特に信長は、一旦の怒に任せ

て明智光秀を打擲したり、本能寺の變の一原因も、こゝに在りと

さへ傳へらる。家康冬志の修養にては、怒ることあるも、じつと辛抱する間には、また感情も和らぎ、思案も浮び出づ、即ち輕舉妄動すること少く、随つて失策破綻も少き所以なり。家康とても、戰國殺伐の時代に人となりたるものなれば、時として殘忍刻薄と評すべき舉動無きに非ず。されども、概しては、沈着縝密にして、寛仁大度の事多し。容易に怒らざるが故に、或は横着といはれ、狸爺とさへ罵らる。かゝる場合には、狸まことに結構なりといふべし。

上來説明したるところは、主として環境の形勢より來れる自然の修養に就いてなり。次に學問勉強によりての修養に就いて一言せんとす。信長は少時専ら武勇に志し、禮儀作法を辨へず。

父
織田信秀

齋藤道三

名は利政
弘治二年(三六)その
子義龍に殺された
年六十三

平出政秀

清秀ともいふ
織田信秀の忠臣
幼主信長の放埒を諫
めて自殺した

周の文王

名は昌
武王の父
岐山
支那陝西省鳳翔府岐
山縣

熊野
謠曲の名

十八歳の時父の法會の際には、袴も着けず、抹香を手摺みにして佛前に投げかけ、觀る者をして、大のうつけ者と感ぜしめたり。美濃の齋藤道三の女と婚約の時にも、無様なる容粧をなし、またうつけ者といはれたり。識者は或は之を視て、後世怖るべしといひしもあるども、概して言語道斷の振舞多く、所謂不良少年の一標本たりしなり。されども廿一歳の時その傳平出政秀の切諫して死するに及び、信長甚く悔悟し、名古屋に政秀寺を建てて其の冥福を祈り、幼時よりの師僧なる禪僧澤彦を招いて、其の住職とす。澤彦は信長といふ名の文字を擇びし人なり、周の文王岐山に起るの故事に據りて、稻葉山の地を岐阜と名づけし人なり、信長の朱印に「天下布武」の文字あるも、また澤彦の撰にかゝる。……信長は此の後とても尙疴癘を起すことあり。或時熊野

少本乙二
一〇

柴田勝家

信長の臣
天正十一年(三三)秀吉と權を争ひて破れ越前北莊に自死した年五十四

を舞ふに當り、柴田勝家を脇に命ぜしに、氣に入らずとて、怒りて忽ち中止せし事あり。明智光秀に大杯を與へしに、飲めずといひしを怒りて、之に飛びかゝり、脇差を抜きて、酒か脇差かと責めし事あり。之を毛利元就が、酒を好む者には、寒さを凌ぎ陣中に元氣を添ふとて之を勧め、好まざる者には、酒は人を怒らす、慎むべきものなりとて餅を勧め、人心を獲たりしに比すれば、蓋し霄壤の差あり。信長は腹立ち紛れに諸將を折檻すること、この他にも少からざりしと見ゆ。さすがの秀吉も或時大いに譴責せられしかば、即ち西國征伐に功を樹て之を土産にせんと期し、夜を日に繼いで駈回りしことあり。天正元年十二月付の安國寺惠瓊の狀あり、その中に「信長の世、五年三年は續くべし、明年あたりは公家などに成らるべし、さ候て後、高轉びに仰のけに轉ばれ

天正元年

正親町天皇の御代
(三三三)
惠瓊
安藝國安國寺の僧

藤吉郎

豊臣秀吉の幼名

候はん、藤吉郎はさりとはのものに候云々といへる文句あり、以て信長と秀吉との對照を見るべし。されども、ともかくにも信長も常に修養に心がけ、暇あれば儒學の士を聘して、古今成敗の迹を聽き、治國平天下の道を講じたり。秀吉は信長ほど短氣の人に非ず。又世には秀吉を無學文盲の代表者の如くにいひなせども、是、眞書太閤記などの傳へたる誤なり。秀吉もとよき學問はせず。されども和歌は多く詠みたり。上手ならざれども、自筆の書狀も多く世に存す。伏見桃山に城くに及びては、一第をこゝに起し、榜を掲げて學問所といふ。こゝに學識ある僧侶を招き、古今の成敗得失などを談ぜしめ、以て治世の參考に供したり。これ、この曠古の英雄も、修養に注意したりしを見るべき一例話なりとす。

眞書太閤記
三百六十卷
作者未詳

貞觀政要 唐の太宗の事蹟を記したもの
 六韜三略 兵書
 太公の六韜黄石公の三略をいふ
 吾妻鏡 鎌倉幕府の日記
 延喜式 朝廷の儀式作法その他を記したもの
 醍醐天皇の朝に成る古今集
 勅撰の和歌集 延喜五年成る
 冷泉爲滿 歌人
 公卿 元和五年(三九七)卒 年六十一
 飛鳥井雅庸 蹴鞠家 國學者 元和元年(三九七)卒 年四十七

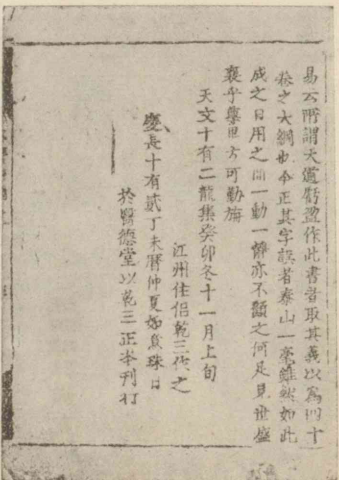


徳川家康 狩野探幽筆 上野寛永寺藏

されどもこの學問修養の點に於ては、信長・秀吉の二人、いづれも遙かに家康に及ばず。家康の學問修養は之を古今東西の名君賢相の中に求むるも、多く其の比を見ざるばかりにて、寧ろ好學ともいふべき域に到達せり。即ち秀吉の如く、耳學問をなすのみならず、自ら書籍を繕きて之を樂しむ。論語・中庸を讀み、史記・漢書・貞觀政要をも讀み、六韜三略をも讀む。藤原惺窩・林道春等、その相手たり。國學の方にては、最も好んで吾妻鑑を讀み、延喜式を讀み、冷泉爲滿に

吉田梵舜 吉田兼右の子
 天海 天台宗の僧 寬永寺の開祖
 寬永二十年(三九七)寂 年百八
 承兌 臨濟宗の僧 京都相國寺の住職
 元信 臨濟宗の僧 京都圓光寺の開山 慶長十七年(三九七)寂 年六十五
 崇傳 臨濟宗の僧 京都金地院の開山 寬永十年(三九七)寂 年六十五
 ウイリヤム、アダムス 英人 家康に仕へて外 事係となつた
 Adams 元和六年(三九〇) 破 年五十五
 William 破 年五十五

古今集を聽き、飛鳥井雅庸に源氏物語を聽き、源氏には造詣特に深し。吉田梵舜に神道を、僧天海に一實神道を聽き、又佛學は、天台宗・禪宗の僧侶を招きて、其の論議問答を聽く。相國寺の承兌、圓光寺の元信、金地院の崇傳など其の顧問に備れり。英人ウイリヤム、アダムス即ち安針等もまた、數學・地理その他西洋の事物に就いて、知識を家康に與へたり。家康は實に鉛筆を用ひ、時計をも用ひ、自ら一種の醫書をも作り、醫藥をも製せしこと、久能山に傳ふるところの其の遺物にて知らる。こゝに於て、戰國時代に散佚したりし古書も收拾せられ、慶長の



慶長活字版 太平記外集

活字本も出版せられ、立法の材料ともせられ、遂に江戸時代文運の隆盛を致す基礎となりたり。此の好學の點に於ては、家康は決して信長・秀吉の比に非ず、自己の人格を完成すると共に、日本の恩人となりたりと稱すべきものなり。(後半略す)

(蘇峰先生 知友新稿)

新國文讀本 卷五終

新國文讀本 卷五

昭和七年八月二十二日印刷
 昭和七年八月二十五日發行
 昭和八年一月二十二日修正再版印刷
 昭和八年一月二十五日修正再版發行



編者

東京市小石川區高田老松町五二番地

吉田彌平

發行者

東京市神田區神保町一丁目五番地

上原才一郎

發行所

東京市神田區神保町一丁目五番地

光風館書店

(電話 國神田三〇八七番)
 (振替口座 東京三二七番)

印刷者

東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二番地
 株式會社 秀英舍

根本力三

文部省檢定

昭和八年一月十三日 中學國語教科書用
 昭和八年七月三十日 實業學校國語教科書用

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はば直に御送本可致候

Nippon
geishya

Horokanai
Sendamachi

Shudo
middle

School
The 1st year
of the 3rd class

No. 19
Kobayashi

修
中

三
血

小
学

林
三